

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第76集

ひがし しん き みち  
東新規道遺跡

1998

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

## 序

濃尾平野のほぼ中央に位置する尾西市は、木曾川・長良川・揖斐川の木曾三川が形成する肥沃な沖積地上にあり、古くから豊かな生産物に恵まれ、発展してきました。また市内には木曾川に分派流である日光川や、これに注ぐ野府川、小信川などが流れており、これらの河川は交通面でも大きな役割を担っていたと思われます。と同時に、これらの河川はたびたび洪水を引き起こし、時に多くの人々の生命を奪う恐ろしい存在でもありました。河川改修の進んだ現在の姿からは想像もできませんが、いろいろな面で人々の生活と深く関わっていたと言えるでしょう。

このたび東新規道遺跡の発掘調査を行ないました。調査の結果、古墳時代、古代、中世といった各時期の遺構が見つかりました。また遺構は見つかりませんでしたが、弥生時代の石器も出土しています。東新規道遺跡のすぐ北には、全国的にも最も古く遡ることができる前方後方墳が発見された西上免遺跡もあり、この地域で古くから人々が生活を営んできた様子が明らかとなってきました。今回の調査の成果が、地域の歴史を学ぶ上での具体的な資料として、また今後学校教育や社会教育の場で活用されることを期待しております。

最後になりましたが、東新規道遺跡の発掘調査につきまして、各方面の方々にご配慮を賜わり、また関係機関および関係者のご指導とご協力をいただいたことに対して、厚く御礼申し上げます。

平成10年8月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

理事長 塩見 修哉

## 例 言

- 1 本書は、愛知県尾西市開明に所在する東新規道遺跡の調査報告書である。
- 2 調査は東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として実施し、愛知県教育委員会を通じての委託事業として、平成7(1995)年8月から平成8(1996)3月まで財団法人愛知県埋蔵文化財センターが調査を実施した。
- 3 発掘調査は赤塚次郎(本センター主査)、今西康二(同調査研究員、現愛知県立丹羽高等学校教諭)、牧謙治(同調査研究員、現愛知県立木曾川高等学校教諭)が担当した。
- 4 調査にあたっては次の各関係機関のご協力を得た。  
愛知県教育委員会文化財課・愛知県埋蔵文化財調査センター・尾西市教育委員会  
愛知県土木部一宮土木事務所・日本道路公団名古屋建設局及び一宮工事事務所
- 5 本書の執筆はIV章を原田幹氏(愛知県教育委員会文化財課主事)が担当し、その他の執筆と編集を伊藤太佳彦(本センター調査研究員)が担当した。
- 6 資料の整理及びトレースなどには田口雄一(本センター調査研究補助員)、遺物整理作業には平野昌子・松田典子・大西多賀子・岩城由枝・加藤美和子・野々垣裕美・高山正美・大津洋子・斎藤智可子(本センター整理補助員)の参加を得た。なお出土遺物の写真撮影は深川進氏にお願いした。
- 7 本書の作製にあたって、弥生時代の石器に関しては原田幹氏、斎野裕彦氏(仙台市富沢遺跡保存館)、御堂島正氏(神奈川県教育庁)、沢田敦氏(新潟県教育庁)に、古代の遺物に関しては尾野善裕氏(京都国立博物館)に、中世の遺物に関しては藤沢良祐氏(瀬戸市埋蔵文化財センター)に、それぞれご教示いただいた。
- 8 調査区に使用した座標は国土座標第Ⅶ系に基づくものである。
- 9 図版に掲載した遺物実測図の縮率は、石器の1/1・1/2を除いて1/4を基本とした。層序の記述は財団法人日本色彩研究所『標準土色帖』による。
- 10 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターが保管している。

# 目次

I	遺跡の立地と環境 .....	1
1	調査の概要 .....	1
2	地理的環境と周辺の遺跡 .....	2
II	遺跡の概要 .....	4
1	層位 .....	4
2	遺跡の概要 .....	4
III	遺構と遺物 .....	12
1	弥生時代 .....	12
2	古墳時代 .....	15
3	古代 .....	18
4	中世 .....	19
IV	考察 .....	24
	東新規道遺跡出土の粗製剥片石器の使用痕 .....	24
V	まとめ .....	29
	付表 .....	30

## 図版目次

図版 1	A区全景	図版 5	粗製剥片石器顕微鏡写真
図版 2	B区全景	図版 6	遺物 1
図版 3	遺構・出土状況 1	図版 7	遺物 2
図版 4	遺構・出土状況 2	図版 8	遺物 3

## 挿図目次

第1図	調査区位置図 (1:5000)	1
第2図	周辺の遺跡 (1:25000)	3
第3図	主要遺構配置図 (1:2000)	4
第4図	B区南壁セクション図 (1:40)	5
第5図	D区東壁セクション図 (1:40)	5
第6図	遺構図 1 (1:200)	6
第7図	遺構図 2 (1:200)	7
第8図	遺構図 3 (1:200)	8
第9図	遺構図 4 (1:200)	9
第10図	遺構図 5 (1:200)	10
第11図	遺構図 6 (1:200)	11
第12図	石器実測図 1 (1:1)	12
第13図	石器実測図 2 (1:2)	13
第14図	石器実測図 3 (1:2)	14
第15図	SD03断面図 (1:40) および出土遺物 (1:4)	15
第16図	SD04断面図 (1:40) および出土遺物 (1:4)	15
第17図	SD19断面図 (1:40) および出土遺物 (1:4)	16
第18図	SK106遺構図 (1:40) および出土遺物 (1:4)	16
第19図	SD16断面図 (1:40) および出土遺物 (1:4)	17
第20図	古代遺物実測図	17
第21図	SK46遺構図 (1:40)	19
第22図	SK43遺構図 (1:40)	20
第23図	SK45遺構図 (1:40)	20
第24図	中世遺物実測図	22
第25図	加工円盤 (1:4)、管玉・土錘 (2:3)	23
第26図	光沢面分布図 (1:3)	28
第27図	光沢強度模式図 (×100)	28

## 表目次

第1表	加工円盤一覧表	23
第2表	粗製剥片石器観察表	27
第3表	観察結果一覧表	27

# I 遺跡の立地と環境

## 1 調査の概要

**調査の経緯** 東新規道遺跡は尾西市開明字東新規道に所在する遺跡である。調査区の現状は標高7mの水田地帯で、北方へ500mの地点には前方後方墳が発見された西上免遺跡が存在する。

東海北陸自動車道建設に伴う平成5年度の試掘調査で奈良時代の溝・土坑が確認され、遺跡の存在が明らかとなったため、日本道路公団及び愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成7年8月から調査を実施した。調査面積は7,294㎡で、これをA B C Dの4区に分割して調査を行ない、平成8年3月に終了した。

**調査の概要** 調査の結果、奈良時代の遺構以外に、古墳時代の遺構群及び中世の遺構群が確認でき、むしろ後者の2つの時期の遺構群が主体となることがわかった。

しかしながら、いずれの時期も遺構の分布は密でなく、遺物量も少ないため、集落の周辺部に位置する遺構と考えられる。古墳時代については東方にでんやま古墳や野見神社古墳が、中世についても現在の野府の集落がのる北西の微高地にやはり当時の集落の中心部が存在したと考えられ、こうした遺跡等との関連で東新規道遺跡をとらえていく必要があるだろう。

また弥生時代についても、遺構は確認できなかったが包含層中から粗製剥片石器や石鏃が出土しており、同様の傾向をうかがうことができる。



第1図 調査区位置図

## 2 地理的環境と周辺の遺跡

**地理的環境** 濃尾平野における沖積平野の地形は、上流側から扇状地地帯、自然堤防卓越地帯、デルタ地帯の3地形帯が典型的に配列しているのを特徴としている。

かつての木曾川本流は現在の境川筋にあり、現在の位置に移ったのは天正14年の大洪水以降とされる。そして「御囲堤」が完成して本流が固定されたわけだが、それ以前は多くの分派流がこの地域を流れていた。東新規道遺跡は木曾川の分派流の1つである日光川によって形成された自然堤防帯に位置し、現在の状況は標高7m前後の水田地帯となっている。

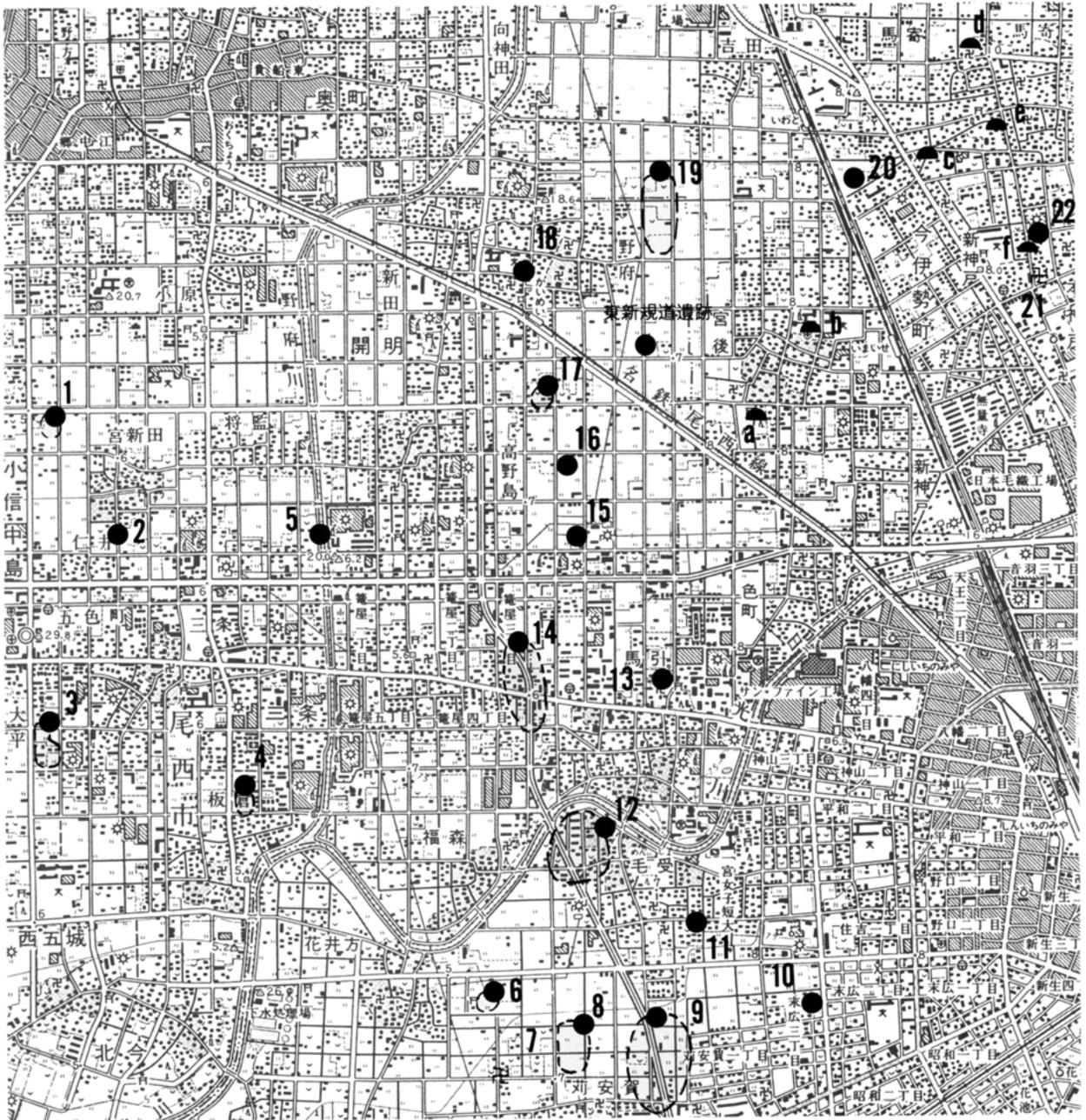
**周辺の遺跡** 周辺の遺跡には、近年の東海北陸自動車道建設に伴う発掘調査によってその内容が明らかとなった遺跡が多い。東新規道遺跡の北約500mの所には、墳長40.5mを測る前方後方墳など3世紀中頃を中心とした遺構群が展開する西上免遺跡が位置している。西上免遺跡の東側の低地部をはさんだ対岸は、全長70mと一宮市内最大の古墳である車塚古墳をはじめとし、野見神社古墳、でんやま古墳、上野屋古墳、西宮社古墳、稲荷山古墳といった多くの古墳が存在する一宮市今伊勢地区にあたる。

反対に南へ800mほど行くと東苺安賀道遺跡がある。もともとは縄文時代の遺物散布地として登録されていた遺跡だが、古墳時代及び中世の集落跡が確認されている。ここからさらに南へ500mほどの所に位置する馬引横手遺跡では、東西方向の溝によって区画された短冊形地割状に展開する室町時代の遺構群とともに、多くの古瀬戸製品が出土している。

馬引横手遺跡の東500mほどの所には、ほぼ同時期に造墓活動が展開する法圓寺中世墓遺跡があり、反対に西に約2kmほど行った大平遺跡では、やはり東西方向の溝によって区画されている中世の遺構群が確認されている。いずれの遺跡も15世紀後半代を境に、洪水の影響によって遺跡が埋没していったと考えられている点が共通している。馬引横手遺跡では13世紀初め頃と思われる時期にも洪水性の堆積物が厚く堆積しており、木曾川本流が固定される以前、この地域の人々が水利・水運の面で木曾川の分派流の恩恵を受けつつも、絶えず洪水の恐怖におびえていた様子をうかがうことができる。

---

井関弘太郎 (1988) 「河道変遷」『木曾三川～その流域と河川技術』建設省中部地方建設局  
 赤塚次郎編 (1997) 『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター  
 伊藤太佳彦 (1996) 「東苺安賀道遺跡」『年報平成7年度』愛知県埋蔵文化財センター  
 伊藤太佳彦 (1996) 「馬引横手遺跡」『年報平成7年度』愛知県埋蔵文化財センター  
 土本典生編 (1995) 『法圓寺中世墓遺跡発掘調査報告書』一宮市教育委員会  
 伊藤和彦編 (1990) 『大平遺跡発掘調査報告書』尾西市教育委員会  
 愛知県教育委員会 (1994) 『愛知県遺跡地図 (I) 尾張地区』



- |                 |                    |                  |
|-----------------|--------------------|------------------|
| 1 畑添遺跡 (弥生)     | 11 竜明寺遺跡 (弥生)      | 21 神戸廃寺          |
| 2 四反田遺跡 (弥生～古墳) | 12 毛受遺跡 (中世)       | 22 目久井遺跡 (弥生・古墳) |
| 3 大平遺跡 (古墳)     | 13 法圓寺中世墓遺跡        | a 野見神社古墳         |
| 4 板倉貝塚 (縄文)     | 14 馬引横手遺跡 (古墳・中世)  | b でんやま古墳         |
| 5 蒲原遺跡 (弥生～古墳)  | 15 東苺安賀道遺跡 (古墳・中世) | c 上野屋古墳          |
| 6 伝治越遺跡 (古墳)    | 16 三味郭遺跡 (古墳)      | d 稲荷山古墳          |
| 7 薬師堂廃寺         | 17 東向野遺跡 (古墳)      | e 西宮社古墳          |
| 8 斎宮寺遺跡 (奈良)    | 18 野府城跡            | f 車塚古墳           |
| 9 八王子遺跡 (弥生～中世) | 19 西上免遺跡 (弥生～中世)   |                  |
| 10 田島遺跡 (弥生～古墳) | 20 中切遺跡 (古墳)       |                  |

第2図 周辺の遺跡

(国土地理院発行1/25000地形図「一宮」をもとに作成)

## Ⅱ 遺跡の概要

### 1. 層位

**基本層序** 東新規道遺跡の基本層序は、上位から耕作土・灰色粘土層・黒褐色粘土層・灰色シルト層・細粒砂層であり、第4層の灰色シルト層で遺構検出を行った。

調査区南半部では遺構検出層である灰色シルト層の堆積は薄く、黒褐色粘土層の堆積もあまり見られないようである。その上には20~30cmの灰色粘土層が堆積して、中世の遺物を包含している（第4図）。

一方調査区北半部では、耕作土を除去するとすぐに遺構検出面となる。また南半部と違って、黒褐色粘土層の堆積は見られるものの、灰色粘土層はあまり見られないようである（第5図）。

### 2. 遺跡の概要

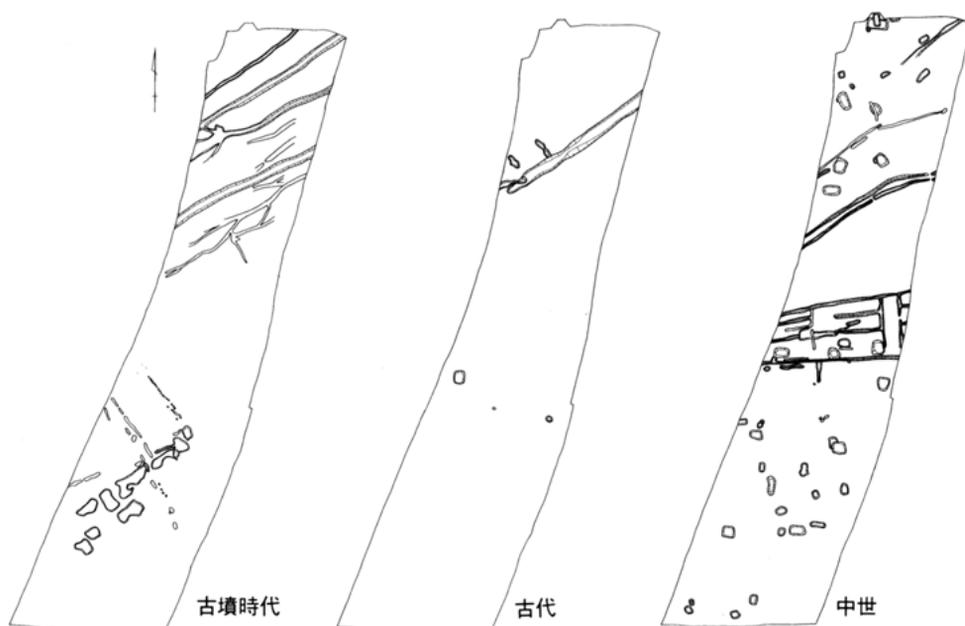
東新規道遺跡は、弥生時代、古墳時代、古代（奈良時代）、中世（鎌倉・室町時代）の4時期に大きく区分することができる（第3図）。

弥生時代については遺構を確認することはできなかったが、7点出土している粗製剥片石器のうち6点に使用痕（刃部周辺の光沢痕）が見られるのが特徴である。

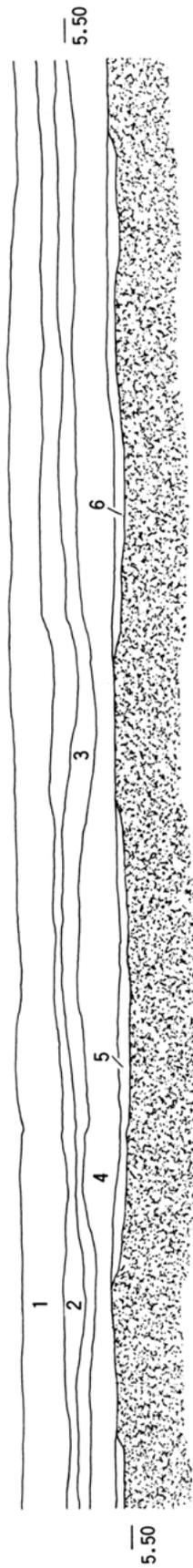
古墳時代の遺構は、調査区北部にある北東から南西方向の溝群と、それと並行するように調査区南部では不定形な土坑状の落ち込みがある。またこの土坑群と直交する形でいくつかの遺構が見られる。

古代の遺構は北東-南西方向の溝が調査区北部で見られる程度である。

中世の遺構としては、やはり同じ方向性を持つ溝群が調査区北部に見られる。調査区中央部にはこれとは方向性の異なる東西方向の溝群があるが、やや時期は新しくなるようである。その他調査区全体に土坑が点在している。

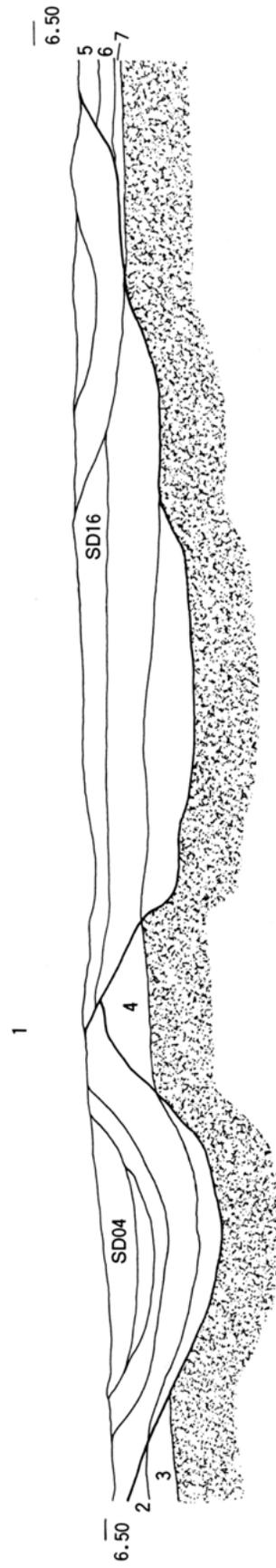


第3図 主要遺構配置図 (1/2000)



- 1. にぶい黄褐色粘土質シルト
- 2. 暗灰黄色粘土
- 3. 灰黄褐色粘土 (鉄斑多い)
- 4. 褐灰色粘土
- 5. 暗灰黄色シルト
- 6. 暗灰黄色シルト

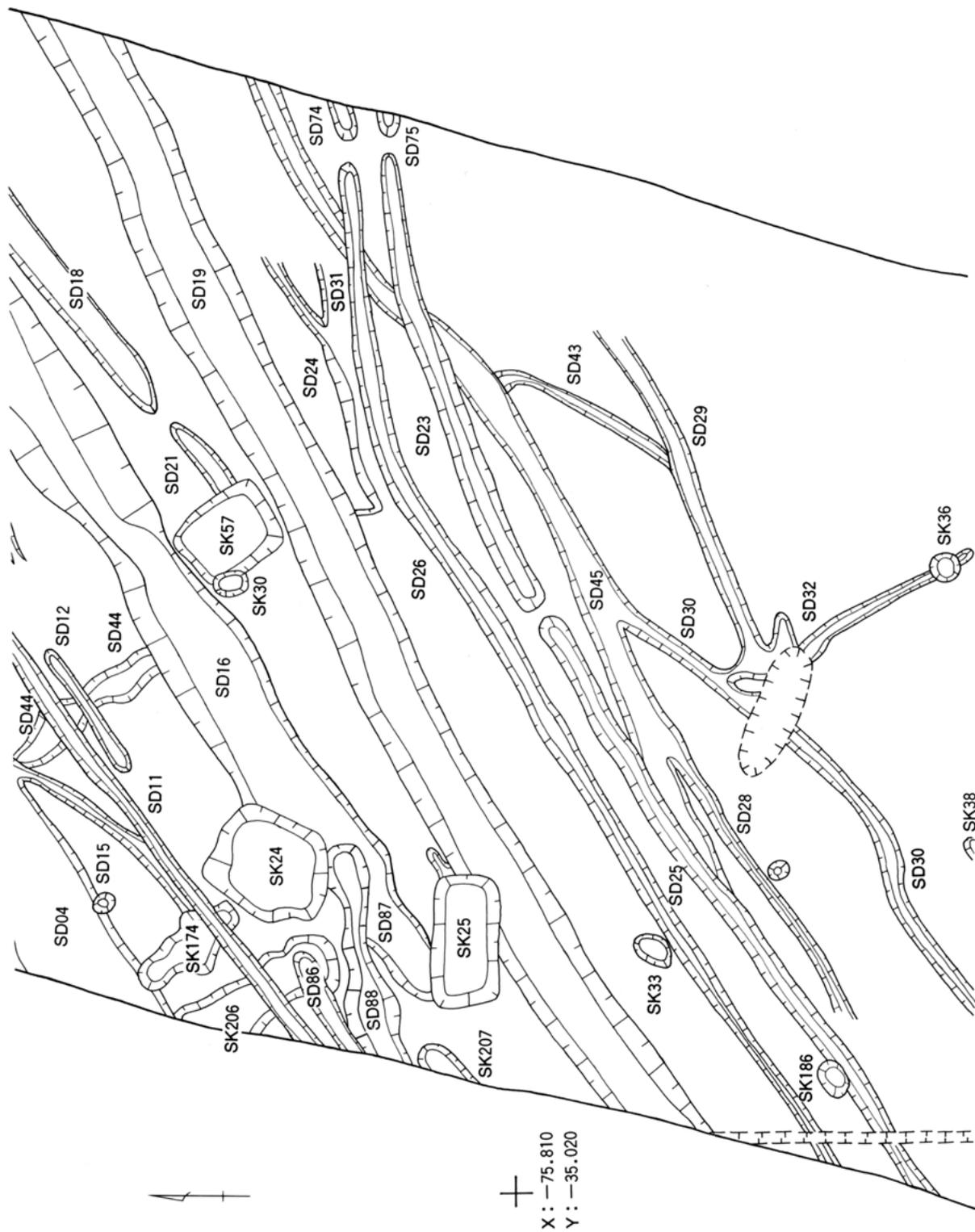
第4図 B区南壁セクション図 (1/40)



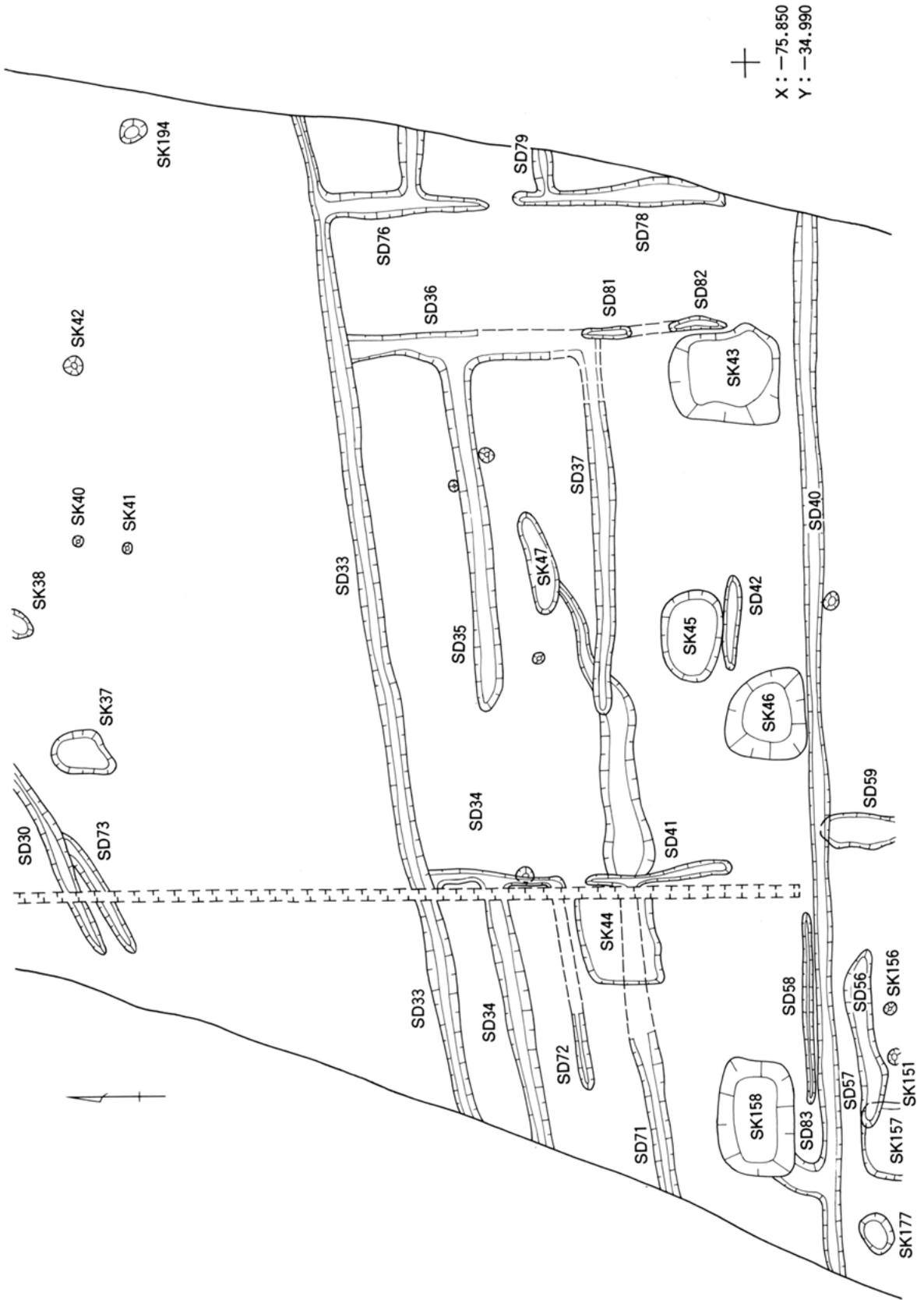
- 1. にぶい黄褐色粘土質シルト
- 2. 暗褐色粘土質シルト
- 3. 黒褐色シルト
- 4. 暗褐色粘土質シルト
- 5. 黄褐色粘土質シルト
- 6. オリープ褐色粘土質

第5図 D区東壁セクション (1/40)

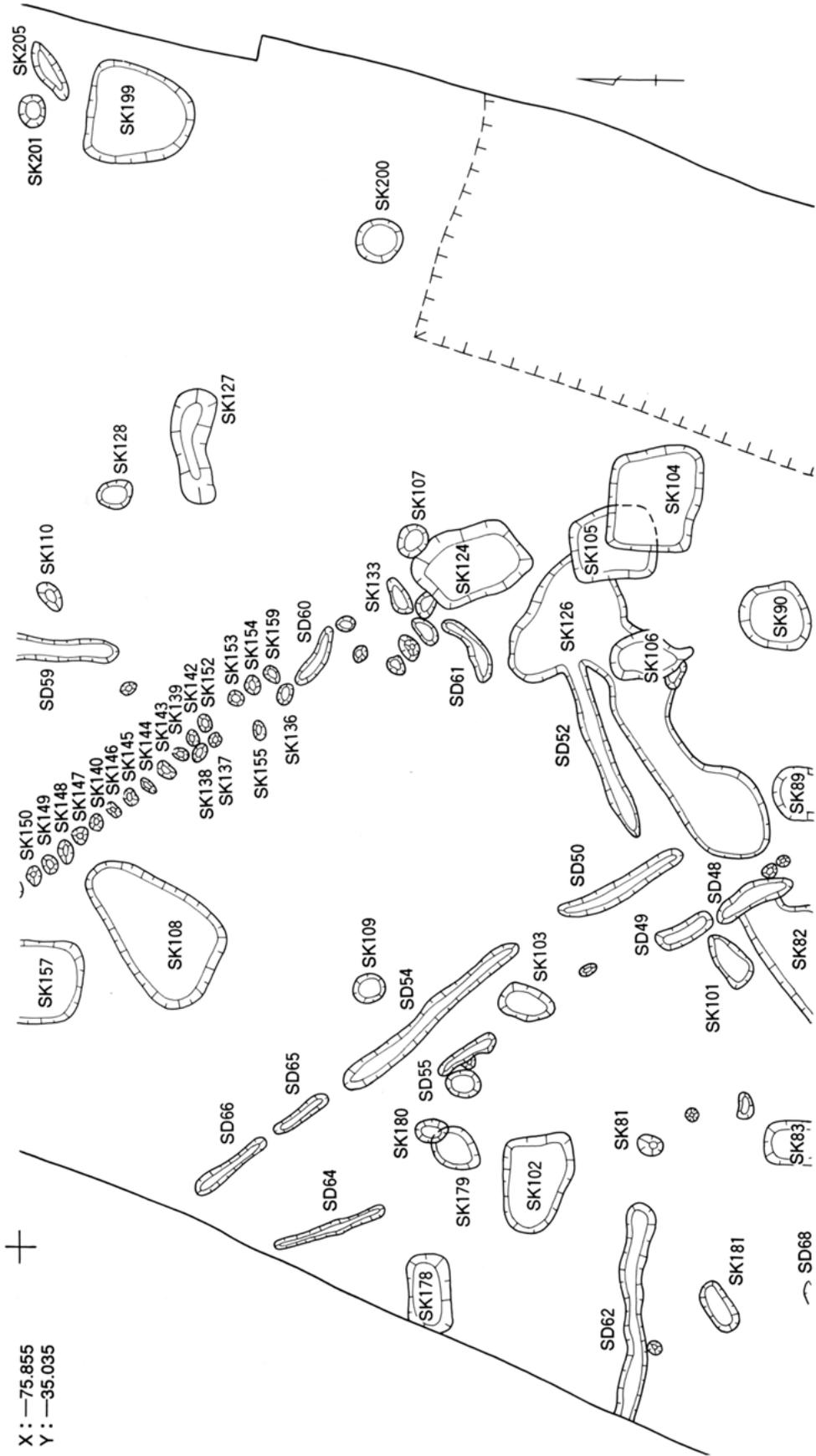




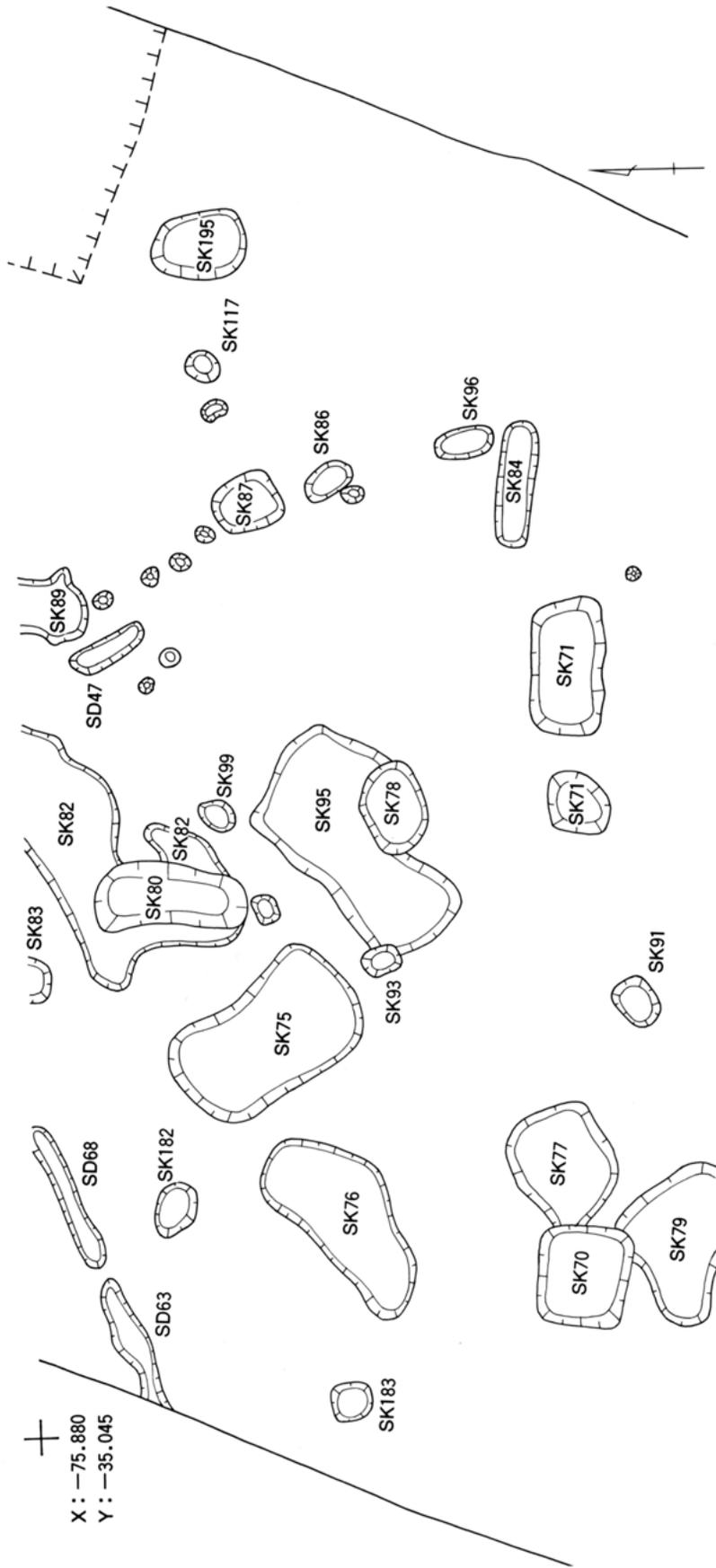
第7図 遺構図2 (1/200)



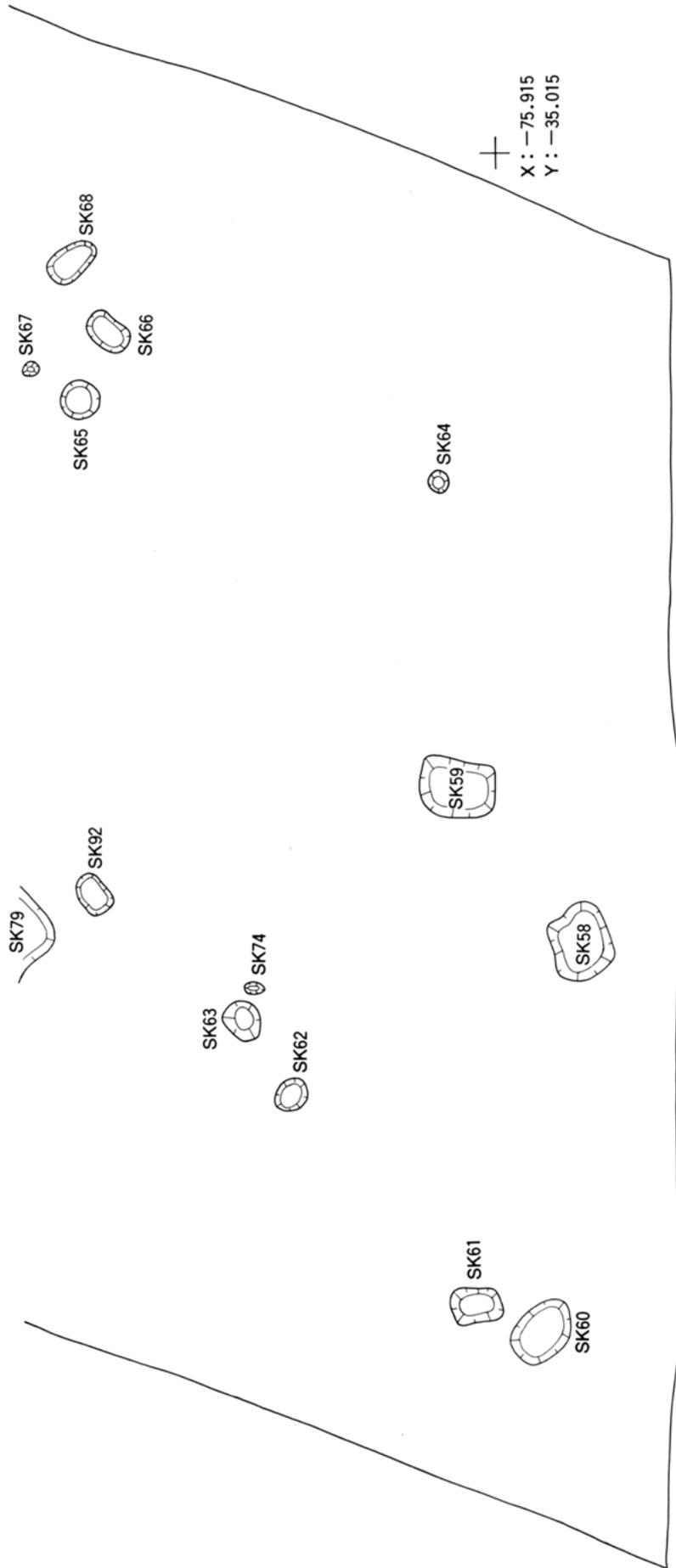
第8図 遺構図3 (1/200)



第9図 遺構図4 (1/200)



第10図 遺構図5 (1/200)



第11図 遺構図6 (1/200)

### Ⅲ 遺構と遺物

#### 1. 弥生時代 (第12~14図)

弥生時代の遺構は確認できなかったが、包含層中から石鏃と粗製剥片石器が出土している。

石鏃

石鏃は5点出土している(1~5)。

1は平基有茎で、片方の側縁がやや外彎する三角形、2は凹基有茎で両側縁が外彎する三角形である。3は茎部が舌状をなすもので、頂部両辺が内彎する五角形である。4は舌状の茎をもつもので、両側縁が外彎する三角形である。5は凸基無茎で、両側縁がやや外彎する三角形である。

石材はすべて下呂石である。

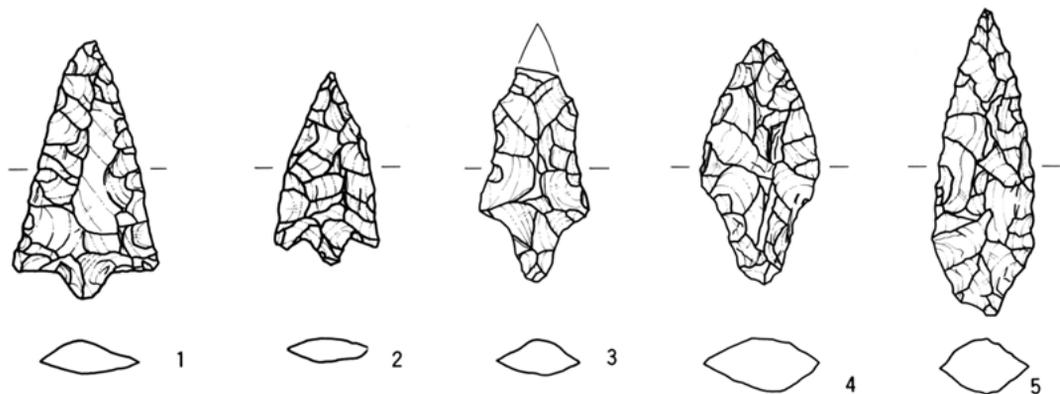
粗製剥片石器

粗製剥片石器は7点出土している(6~12)。

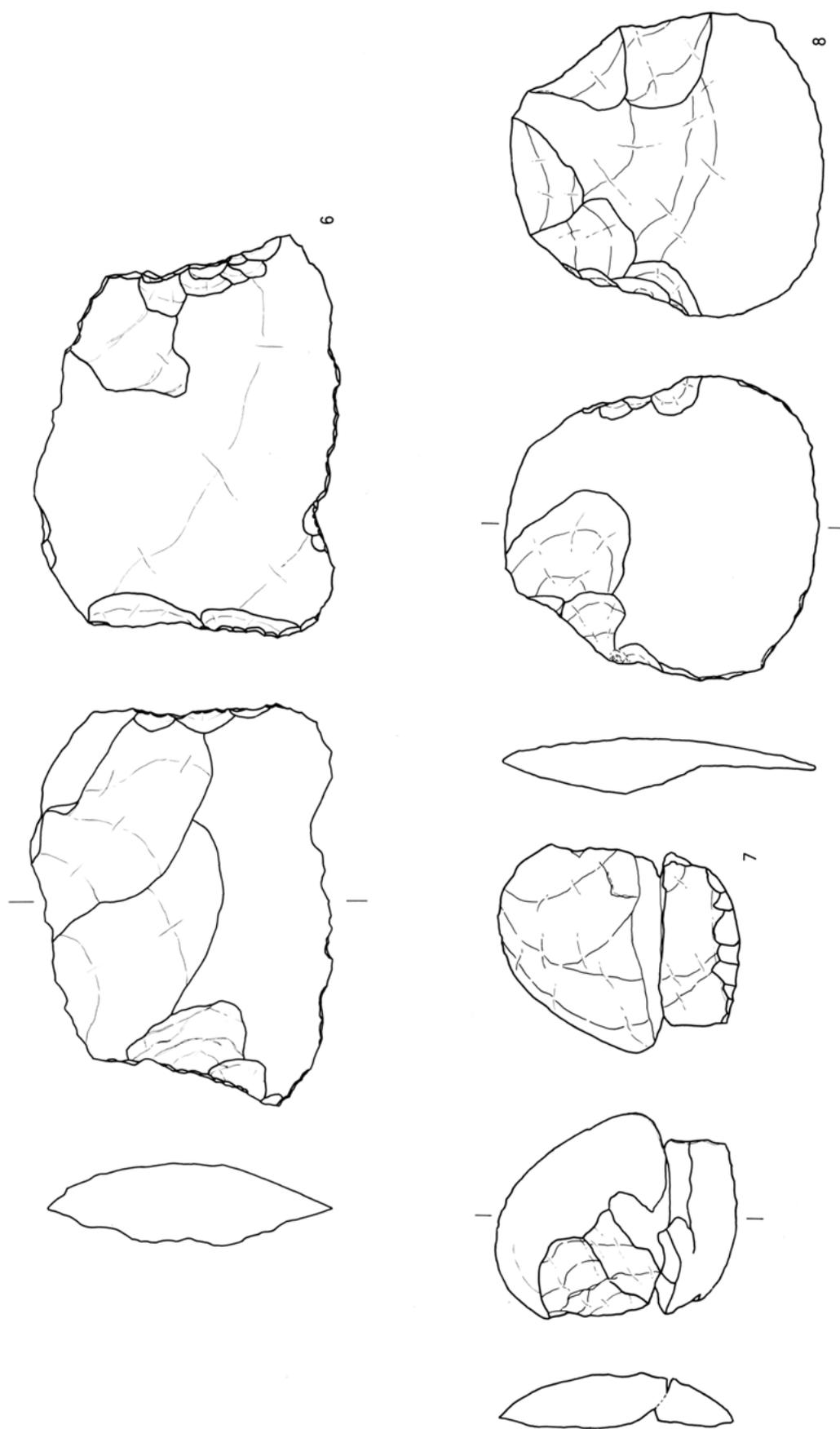
基本的には剥片の両側面に加工を加えるタイプである。大きさとしては、大形の6、中形の8と12、小形の7および9~11の3つに大きく分けられそうである。通常、打撃点と反対側に生じる鋭い縁辺を刃部とするが、東新規道遺跡の場合、7点のうち6点の刃部周辺に使用痕(光沢)が認められるのが大きな特徴である。ただし7は、普通刃部として用いられるところとは別の側縁に使用痕(光沢)が見られる。また残りの1点(9)についてもかなり磨耗しており、もともとあった光沢面がはがれてしまった可能性もある。

さらに10には光沢痕の他にも敲打痕が側縁全体に認められ、転用して使われた可能性がある。

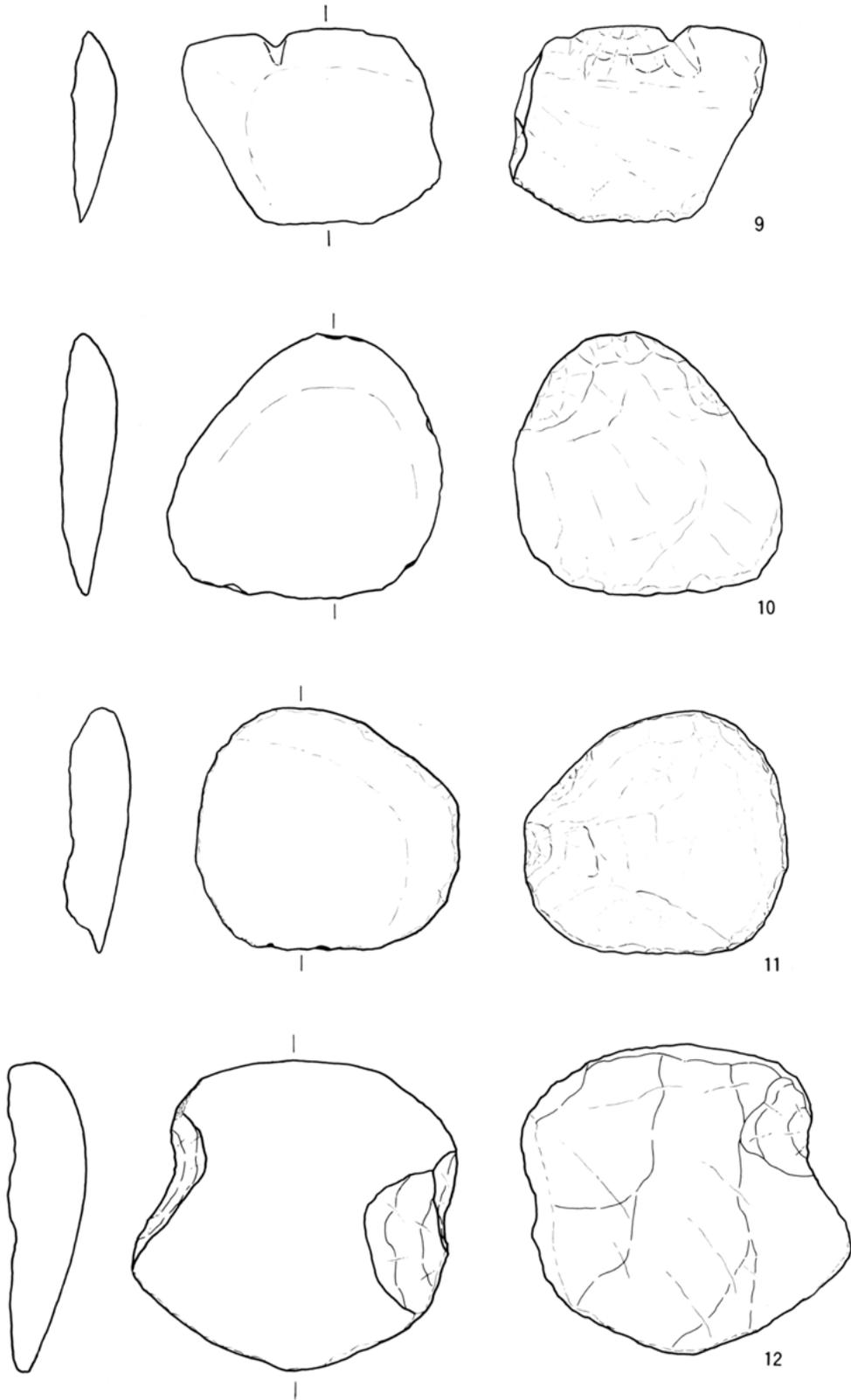
石材は7、9、10の3点がホルンフェルス、他の4点が砂岩である。



第12図 石器実測図1 (1/1)



第13図 石器実測図2 (1/2)



第14図 石器実測図3 (1/2)

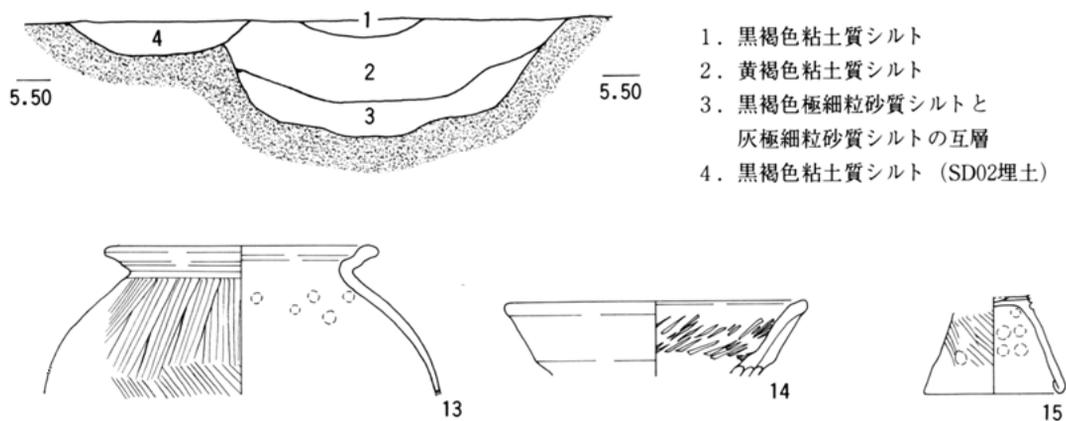
2. 古墳時代 (第15~18図)

主要な遺構  
について

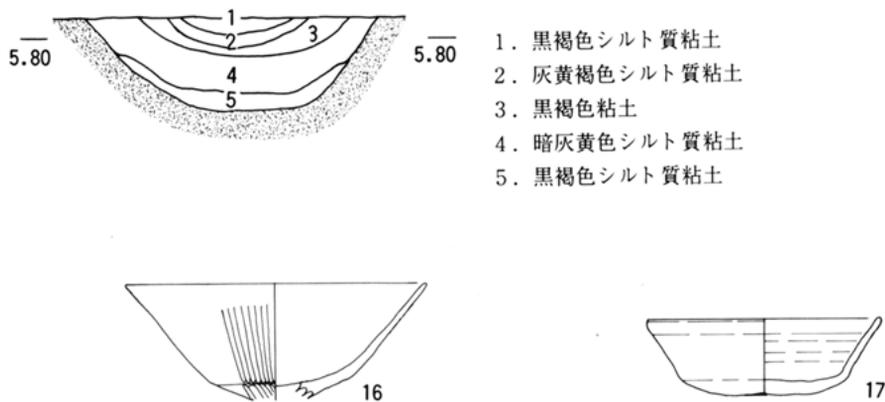
古墳時代の主要な遺構としては、調査区北部の溝群と、調査区南部の溝および土坑群とがあげられる (第3図)。

調査区北部に位置するSD01、03、04、19といった溝は、いずれも北東-南西といった方向性を持つことを特徴としている。そしてこの溝群とはほぼ並行する位置関係にあるのが、SK75、76、77、79、82、95、124といった調査区南部の土坑群である。これらの土坑は不定形で、深さも数cm程度の浅いものである。

この北部の溝群と南部の土坑群とをつなぐような位置関係にあるのが、SD50、54、65、66といった北西-南東方向の溝群である。これらの溝は幅40cm、深さ15cm程度で、もともとは一続きの溝であった可能性もある。



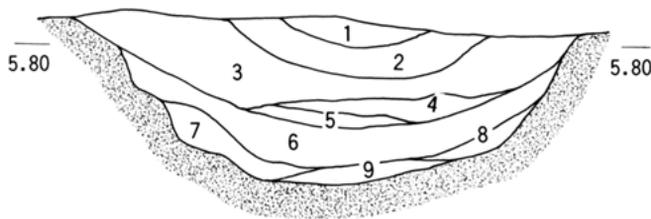
第15図 SD03断面図 (1/40) および出土遺物 (1/4)



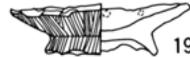
第16図 SD04断面図 (1/40) および出土遺物 (1/4)

またSK139～159は、SK124の北側辺りから北西の方向にのびる土坑列だが、長径約50cmの楕円形の土坑がおよそ66cmほどの間隔で直線上に並び、ちょうどSD50などの一連の溝と並行する位置関係にある。

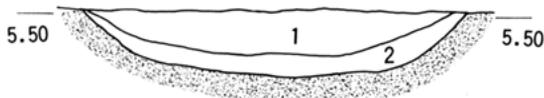
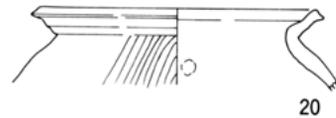
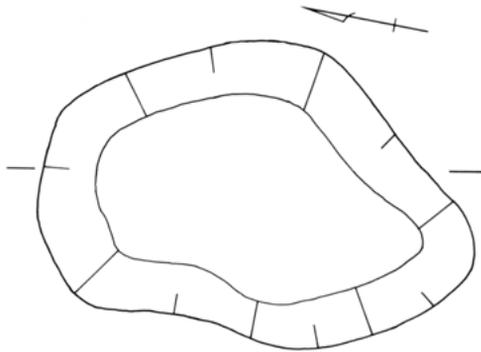
以上のように、東新規道遺跡の古墳時代の遺構は、調査区の北と南にそれぞれ位置する北東-南西方向の溝および土坑群を基本とし、この2つの遺構群をつなぐかのように、直交する北西-南東方向の遺構群が存在しているようである。とはいうものの、これ以外にはほとんど遺構は見あたらないのも事実で、出土した遺物の量もきわめて少ない。



- 1. 灰黄褐色粘土質シルト
- 2. 黒褐色粘土質シルト
- 3. 暗灰黄色シルト質粘土
- 4. 暗灰黄色中粒砂（上層は粗粒砂含む）
- 5. 暗灰黄色シルト質極細粒砂
- 6. 黒褐色粘土質シルト（上層は粗粒砂含む）
- 7. 暗灰黄色シルト
- 8. 灰白色細粒砂
- 9. 暗灰黄色シルト

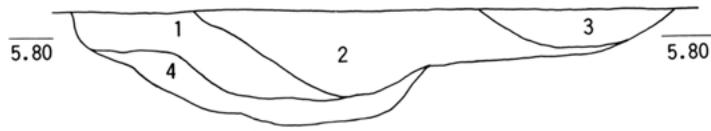


第17図 SD19断面図（1/40）および出土遺物（1/4）

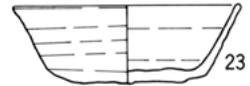


- 1. 暗灰黄色シルト
- 2. 黒褐色粘土質シルト（細粒砂混）

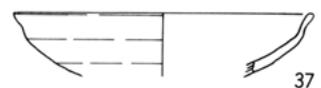
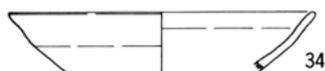
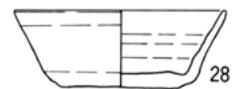
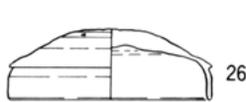
第18図 SK106遺構図（1/40）およびSD75出土遺物（1/4）



1. オリーブ褐色シルト、灰黄褐色極細粒砂、灰黄褐色細粒砂の互層
2. 暗灰黄色シルト、灰黄褐色極細粒砂、にぶい黄橙色粗粒砂の互層
3. 灰黄褐色シルト質粘土
4. 黒褐色粘土



第19図 SD16断面図 (1/40) および出土遺物 (1/4)



第20図 古代遺物実測図

次に主要な遺構ごとに遺物を見ていくことにする。

SD03 SD03は幅が205 cm、深さが58 cmの断面がU字形の溝である。その上層からは松河戸Ⅱ式期の宇田型甕1類(13)が、下層からはS字甕D類の台部(15)や柳ヶ坪型壺(14)が出土している。柳ヶ坪型壺は松河戸Ⅰ式の後半期のものである。

SD04 SD03の南側を並行して走るSD04は、幅が175 cm、深さが50 cmの断面がU字形の溝である。ここから出土した高杯(16)は杯部が深く、外面はタテミガキ調整を施している。無透孔屈折脚高杯の杯部で、松河戸Ⅰ式前半期のものである。同じくSD04からは美濃須衛窯産の8世紀前半頃の杯(17)も出土している。

SD19 やはり北東-南西方向の溝であるSD19は、SD04のさらに南側に位置し、幅220 cm、深さが70 cmとやや規模が大きくなっている。ここからは廻間Ⅲ式期の遺物(18、19)が出土しており、時期的にもやや古くなるようである。

SK106 SK75など これらの溝と同じ方向性を持つ調査区南部の土坑群は、断面図を示したSK106(第18図)は深さが38 cmとやや深くなっているが、SK75が深さ8 cm、SK76が深さ5 cm、SK79が深さ6 cm、SK82が深さ9 cm、SK95が深さ6 cm、SK124が深さ24 cmと、全体的にかなり浅く、遺物もほとんど出土していない。そのうちの1つであるSK75からはS字甕D類新段階の口縁が出土している(20)。松河戸Ⅱ式期のものであり、これらの土坑群は調査区北部の溝群とほぼ同時期のものと考えて良さそうである。またSK76からは管玉が出土している(第25図77)。

### 3. 古代(第19・20図)

古代の段階の遺構は、調査区北部のSD16を除けば、ほとんど遺構はないといった状況である(第3図)。

SD16 SD16は幅が320 cm、深さが56 cmで、古墳時代の調査区北部の溝群と同じように、やはり北東-南西といった方向性を持っている。

上層から出土した21と22は、ともに口径12 cm、器高3.5 cm程度的美濃須衛窯産の杯で、21の口縁がやや内彎気味なのに対して、22はやや開き気味である。21の体部外面には墨書が認められる。23も口径12 cm、器高4.1 cmの杯で、こちらには底部外面にヘラ記号が認められる。その他短頸壺の口縁部かと思われる破片(24)や、蓋(25)などが出土している。

これらの遺物はいずれも美濃須衛窯の製品で、7世紀後半と考えられる25を除いて、おおむね8世紀を中心とした時期のものと考えられる。

その他の遺物

その他の遺物については第20図にまとめた。

26は猿投・尾北窯系の7世紀後半の蓋だが、29と31は美濃須衛窯の製品で、8世紀頃のものと考えられる。28は口径11.2 cm、器高4.1 cmの尾北窯産の8世紀前半の杯で、底部外面にヘラ記号が認められる。またかなり磨耗しているが、広口壺底部外面(32)にもヘラ記号がある。27は美濃須衛窯産の小型の甕の口縁、30は8世紀前半のSの口縁である。33は美濃須衛窯産の7世紀後半代の杯、34は11世紀の灰

釉陶器の椀、35が美濃須衛窯産の8世紀後半の長頸瓶の底部である。その他、包含層中からは美濃須衛窯産の平瓶の底部(36)が出土している。8世紀前半のものである。

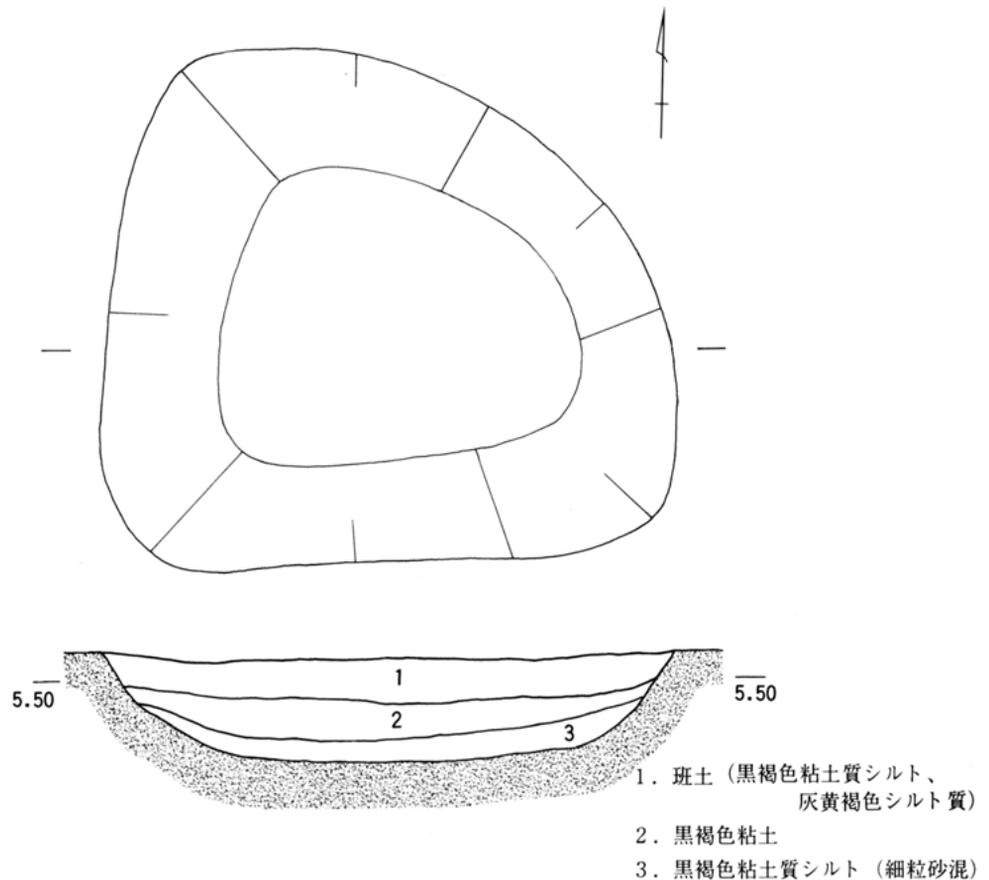
全体的にこの時期の遺物は美濃須衛窯産のものがほとんどで、時期的にも8世紀のものが主体となっていると言えそうである。

### 3. 中世(第21~25図)

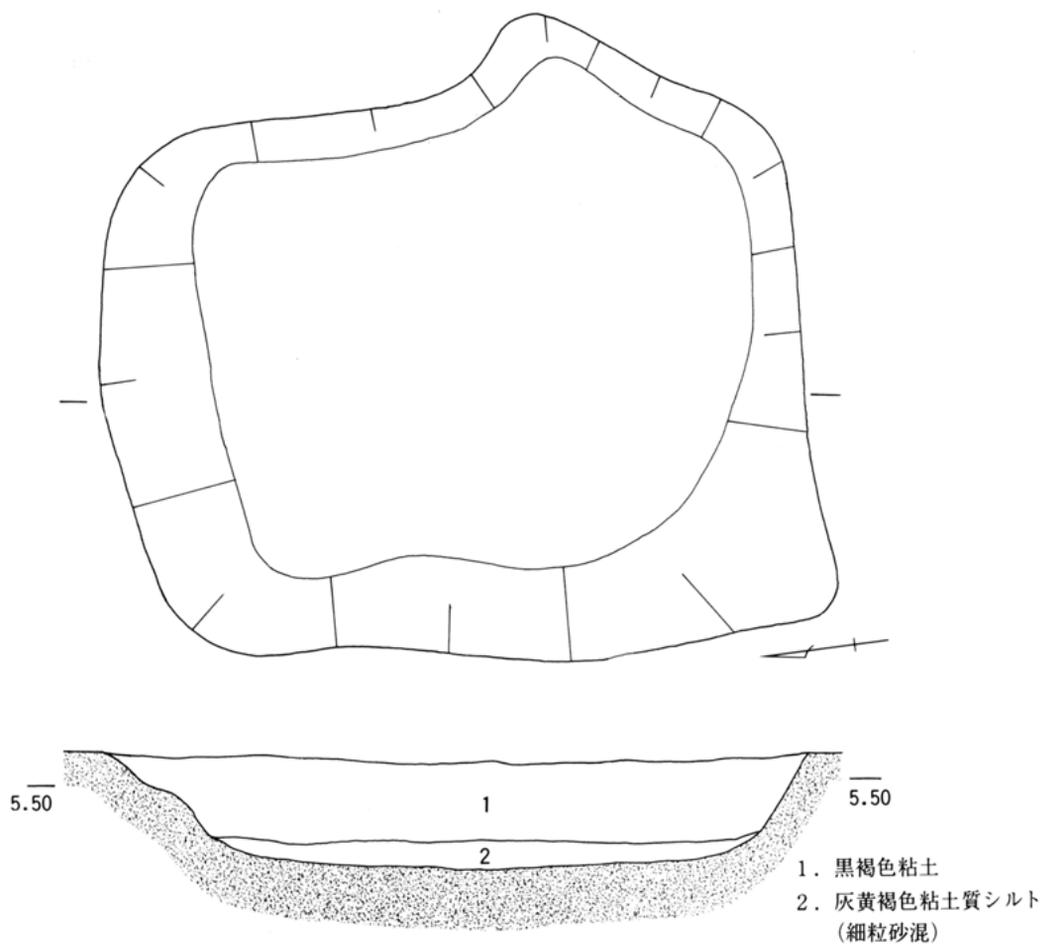
#### 主要な遺構について

中世の遺構としては、調査区北部の溝と中央部の溝、そして調査区全体に点在する土坑があげられる(第3図)。

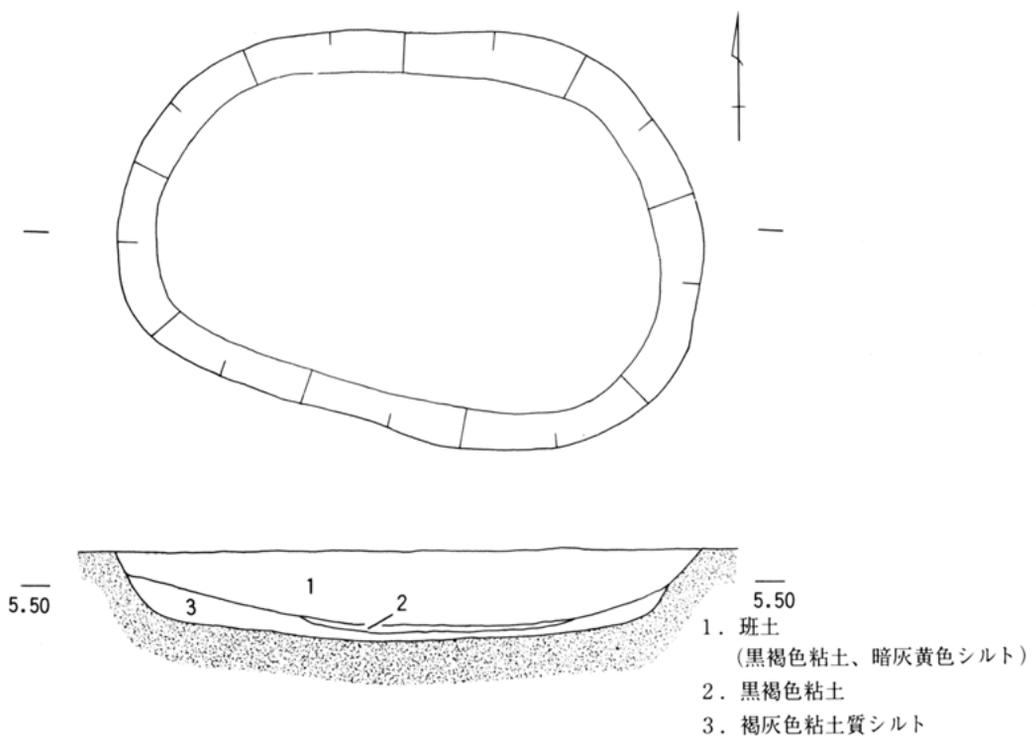
このうちSD23、25、75や、そのすぐ北側を並行して走るSD26、74といった調査区北部の溝群は、やはり北東-南西という方向性を持っているようであるが、東に行くに従ってやや南に振るようである。幅40~60cm、深さ30~50cmほどのこれらの溝は、50cmほど間をあけながら続いているようである。そしてこの溝の北側には、いくつかの土坑が展開しているが、南側には遺構が見られない。SK01、25、57、172、184といった溝の北側の土坑は、おおむね長方形を基本とした平面形をしており、深さ60cmほどで断面が箱形のものが多ようである。



第21図 SK46遺構図(1/40)



第22図 SK43遺構図 (1/40)



第23図 SK45遺構図 (1/40)

調査区中央部には、SD33～35、37、40、71、72、79といった東西方向の溝群と、SD36、41、76、78といった南北方向の溝群があり、いくつかの長方形の区画を形成している。これらは幅が50～80cm、深さが10～20cm程度の断面形が皿形の溝である。

この溝から南側の部分にもいくつかの土坑が点在している。このうちのSK43、45、46の図面を載せておいたが（第21～23図）、長軸が300～360cm、短軸が210～300cmほどの方形に近い楕円形で、深さは50～60cmほどである。これらの土坑群も溝と同じように東西－南北の方向性を意識しているようにも見える。

このように中世の段階の遺構は、調査区北部の遺構群および調査区中央から南部にかけての遺構群とで構成されている。このうち北部の遺構群が古墳時代以来の北東－南西の方向性を維持しているのに対して、中央から南の遺構群の方向性はやや異なっており、大きく2つに分けて考えられそうである。

つづいて出土遺物について、遺構ごとに見ていきたい。

#### 調査区北部 の遺構群

まず調査区北部の遺構群だが、SD23からは尾張型第5型式期の碗（40）が、SD23のすぐ北側を並行して走るSD26からは東濃型明和1号窯式期の碗（41）が出土している。その他SD18からは口径約15cm、器高4.6cmの尾張型第5型式期の碗（38）、SD22からは東濃型明和1号窯式期の碗（39）が出土しており、39の底部外面には墨書が見られる。

調査区北部の土坑群では、SK18から口径13.4cm、器高5.5cmの東濃型の碗（43）と、口径約15cm、器高5.1cmの尾張型の碗（42）が出土している。43は第5型式の新段階のもの、42は第6型式期のもので、猿投窯の製品と思われる。SK25では、口径約15cm、器高5.8cmの尾張型第3型式期の碗（45）のほか、尾張型第4型式期の碗の底部（46）が出土している。ともに瀬戸窯の製品と考えられるが、46の内面には炭化物が厚く付着している。

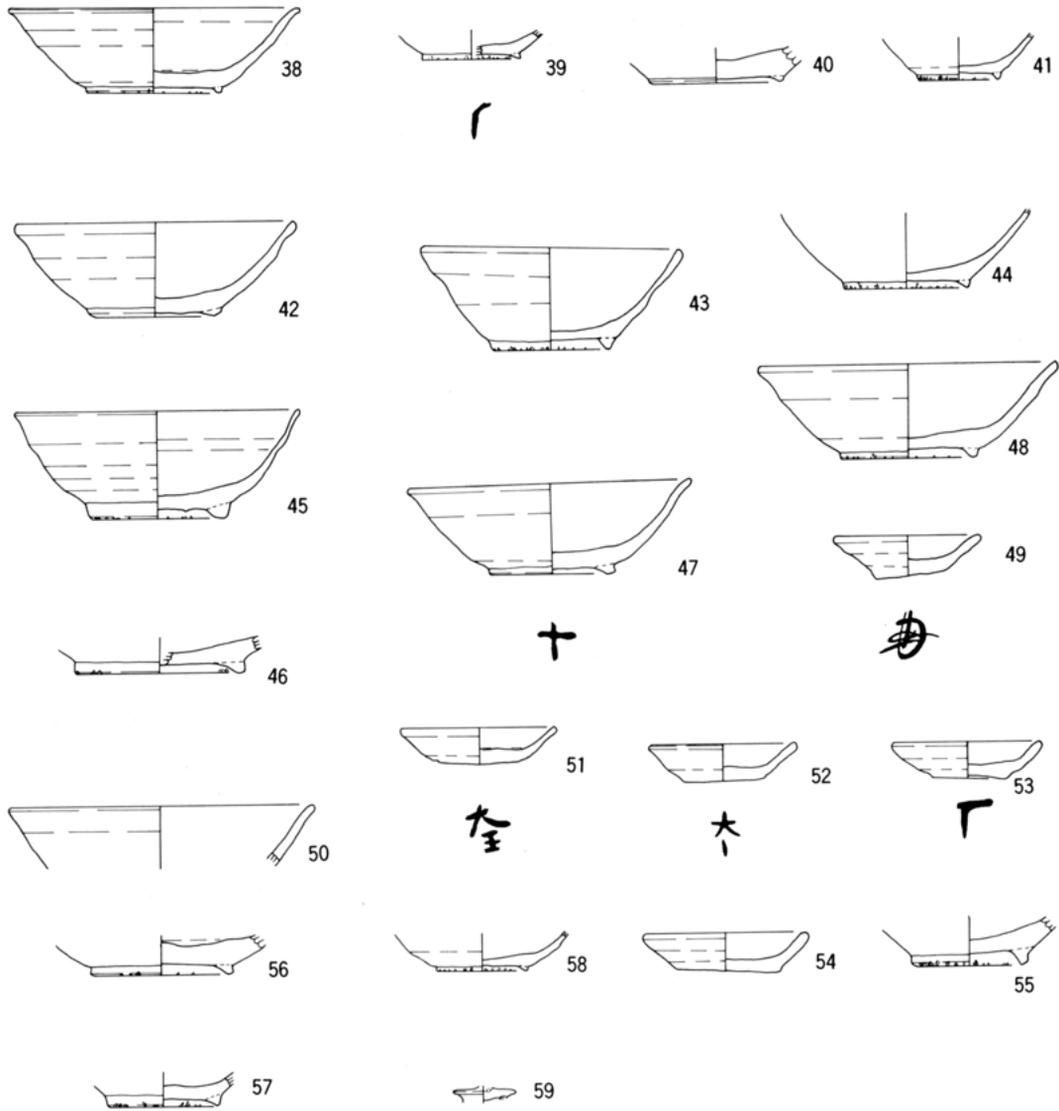
SK172からは底部外面に墨書の書かれた小皿がまとまって出土しているのが目を引く（51～53）。口径が7.7～8.1cm、器高2.0cmの小皿で、いずれも尾張第5型式期のものである。この他にも口径8.5cm、器高2.0cmの尾張型第6型式の小皿（54）などが出土している。

#### 調査区中央 部から南部 の遺構群

これに対して調査区中央部から南部にかけての遺構群は図示できるような遺物が少ないのだが、SK158からは墨書のある2点（47、49）を含めてまとまった遺物が出土している。47は口径14.8cm、器高4.9cmの尾張型第5型式期の碗で猿投窯の製品、49は口径7.6cm、器高1.2cmの尾張型第5型式期の小皿で、どちらにも底部外面に墨書が見られる。また48は、口径約15.6cm、器高5.0cmの尾張型の碗で、第4型式古段階のものである。その他の遺物としては、東濃型第5型式古段階の碗（44）がSK44から、口径16cmほどの尾張型第6型式期の碗（50）がSK201から出土している程度である。

#### 加工円盤

その他の遺物としては、加工円盤が17点出土している（60～76）。加工円盤については、以下のように分類した。



第24図 中世遺物実測図

A 1 a類 : 灰釉系陶器碗・皿の高台部を打製加工し、高台部がほぼ中央に位置するもの

A 1 b類 : 灰釉系陶器碗・皿の高台部を打製加工し、高台部は一方にかたよるもの

A 2類 : 灰釉系陶器碗・皿の高台部以外を素材とするものすべて (打製加工)

B類 : 須恵器を打製加工したもの

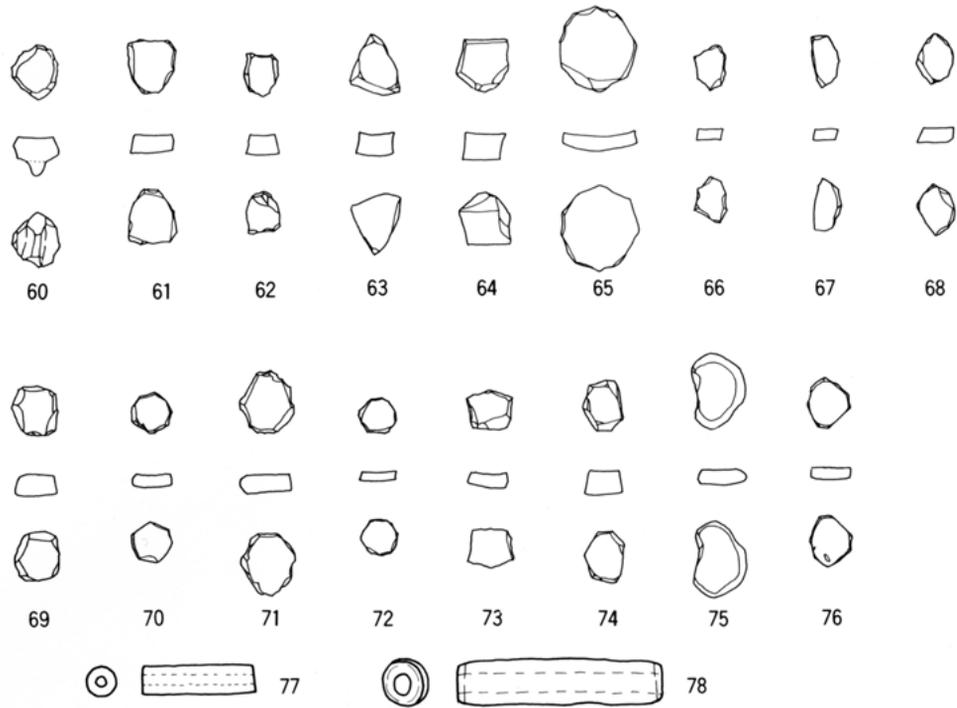
C 1類 : 焼締陶器を打製加工したもの

C 2類 : 焼締陶器を磨製加工したもの

D 1類 : 施釉陶器を打製加工したもの

D 2類 : 施釉陶器を磨製加工したもの

すべて包含層中からの出土で、内訳はA 1 a類が1点、A 2類が1点、C 1類が2点、D 1類が10点、D 2類が2点である。施釉陶器を打製加工したものが17点中10点と半数以上を占めた。



第25図 加工円盤 (1/4) 管玉・土錘 (2/3)

No.	区	グリッド	遺構番号	分類	長軸(mm)	短軸(mm)	重量(g)	備考
60	B	IX J 14o	検出 I	A 1a	29	25	12	
61	B	IX J 12s	検出 I	A 2	28	24	7.7	
62	B	IX J 12s	検出 I	C 1	21	18	5.5	
63	B	IX J 12s	検出 I	C 1	30	20	10.2	
64	B	IX J 12p	検出 I	D 1	28	42	16.5	
66	A	IX J 2a	検出 I	D 1	24	18	2.4	
67	A	IX J 2a	検出 I	D 1	28	15	(2.8)	半分欠損
68	A	VIII J 20t	検出 I	D 1	28	20	4.7	
69	A	IX J 3s	検出 I	D 1	26	23	8.5	
70	A	VIII A 1a	検出 I	D 1	22	21	3.2	
71	A	VIII A 15b	検出 I	D 1	32	28	10.2	播鉢
72	A	VIII J 20t	検出 I	D 1	20	19	2.1	
73	B	IX J 12p	検出 I	D 1	21	21	4.6	
74	C	C区北半部	検出 I	D 1	26	21	9.4	
75	B	IX J 12p	検出 I	D 2	39	26	(10.0)	一部欠損
76	C	IX J 1 r	検出 I	D 2	26	21	4.3	
				平均	27.8	22.8	7.7	

第1表 加工円盤一覧表

加工円盤の分類については赤塚次郎編(1987)『土田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター、赤塚次郎編(1994)『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター等を参考にした。

## IV 考察

### 『東新規道遺跡出土粗製剥片石器の使用痕』

原田 幹（愛知県教育委員会文化財課）

東新規道遺跡の発掘調査では、弥生時代に属するとみられる粗製剥片石器が出土している。粗製剥片石器については、磨製石庖丁の出土が少ない当地域にあって、これを代用する石器と考える意見があり（文献2ほか）、筆者も概観的な整理を行ったことがある（文献5）。本稿では、金属顕微鏡を用いた使用痕の観察によってこの石器の機能・用途の推定に一定の方向性を導き出すことを目的としている。

#### 1. 資料の概要

出土した粗製剥片石器は7点である。まず、石器の特徴について、法量、形態、石材、肉眼で観察される刃部の状態について概観しておきたい。なお、各資料の詳細は第2表に記したので参照されたい。

**法量** 法量の記載は、長さ・幅・厚さ、刃長、重さ、刃部角について計測した。実測図では石器の刃部と推定される部位を下辺とし、縦位の最大値を長さ、横位の最大値を幅、断面の最大値を厚さとしている。刃長は形態上刃部として使用可能と推定される部位の長さである。刃部角は剥片の断面の形状によって規定される角度である。計測する部位によって角度にばらつきがあり、平均的な数値を記載している。各石器の法量であるが、最大は6で重さ386g・刃長12.8cm、最小は9の重さ73g・刃長5.6cmである。資料の母数が少ないこともあるが、法量の分布に一定の傾向はみられず、大きさは多様である。刃部角は10～50度の範囲にばらつくが、おおむね30度前後の比較的鋭い刃部をもっている。

**形態的な特徴** 形態分類については、素材剥片の形状による分類（Ⅰ～Ⅲ類）、調整加工と平面形による分類（A・B・C 1～5・D 1～5類）案を提示しており（文献5）、今回もそれを用いている。6が両面とも剥離面からなり一部に自然面を残すⅡ類で、他は自然面と剥離面からなる一次剥片を用いたⅠ類である。記述に際しては、自然面を有する方をA面、剥離面をB面としている。調整加工では、側辺に剥離、敲打による調整を施すC類、側辺及び背部に調整を施すD類が多い。調整加工を施さないA類は7・9である。9は側辺及び背部に連続する敲打痕が観察されるが、調整であるか使用痕であるか判別ができず、素材剥片の形状を大きく変えていないことからA類とした。本遺跡出土資料は、側辺に抉り状の調整剥離を施すものが主体となっている。

**石材** 石材は砂岩製4点、ホルンフェルス製3点である。粗製剥片石器の石材としては砂岩が一般的であるが、他にホルンフェルス、泥岩、安山岩等の石材が用いられる場合がある。いずれも遺跡周辺の河川で採集される河原石を素材としていると思われる。

**刃部の状態** 刃部の状態は、調整加工、使用痕、自然作用を含むが、これらの識別は難しい場合がある。剥離（a）、小剥離（b）のうち調整剥離の可能性のあるものは、7・10のB面で観察されるが、明瞭なものではない。特徴的なのは、コーングロスあるいは

ロー状光沢 (g) と呼ばれるもので、4点について観察された。この他使用痕の可能性のあるものに、刃部の摩耗 (c)、潰れ (敲打?・f)、欠損 (e) がある。

資料の時期 7点の資料の帰属時期は指標となる土器の出土がなく不明であるが、これまでの出土例からみて、側辺に調整加工を施すC類、D類は弥生時代中期に特徴的な形態である。今回の出土資料もこの時期のものと考えておきたい。

## 2. 金属顕微鏡による使用痕の観察

7点の資料全てについて金属顕微鏡による観察を実施した。観察は主に使用光沢面 (ポリッシュ) の検出を目的とし、顕微鏡の倍率は主に100倍と200倍で行った。以下、観察に際して設定した基準について記述する。

光沢面の分類 光沢面の分類と対象物、使用法、使用頻度等との関係については、阿子島香氏の著書 (文献1) にまとめられており、この分類基準が一般的に用いられている。観察にあたってはこの分類を参考にしているが、実験データがなく筆者の観察がどこまで対応しているか不安もあり、本稿では①～③類の独自の設定を行った。あくまでも便宜的な分類である。

- ①類 明るく、丸味をもつ (水滴状)。主に微凸凹の高所にみられる。
- ②類 明るく、丸味をもつ。①類が発達し接続したもの。
- ③類 明るく、平滑な外観を呈し、輪郭は丸味をもつ。微凸凹の高所から低所にみられ、光沢内にピット、線状痕を伴うものが多い。

光沢面の強度分布 顕微鏡視野における光沢面の分布状況を強・中・弱の3段階に分け、実測図にその範囲を表記した。各段階の境界は漸移的である (第27図)。

線状痕 本稿では光沢面上に観察された溝状の線状痕について記述している。線状痕の方向は刃部に対する方向で主体的なものについて記録し、実測図上に矢印で表記した。

## 3. 観察結果 (第3表・第26図・図版5)

観察の結果、7点中6点について光沢面が観察された。光沢面を検出できなかったホルンフェルス製の9は、石器表面の摩滅が著しく観察不能であった。同じ石材の10も摩滅しており、極一部に光沢面が残存していたが、光沢の強度分布は不明である。他の製品については、いずれも刃縁に①～③類の光沢面が観察され、刃部から刃縁にかけて③→②→①類と漸移的に推移している。これは強・中・弱の強度分布の範囲とほぼ対応している。光沢の分布は、光沢範囲の中央付近で最も幅が広くなり、左右対象に近い山形を呈するものが多い。光沢範囲幅の最大のもは6のB面で3.0cmである。A面、B面とも光沢面が観察された6～8・11では光沢範囲が表裏対称に形成されている。なお、光沢面は石器の自然面と剥離面では若干異なった発達をするようである。自然面は自然の研磨により表面の微凸凹が比較的少なく、広い範囲に光沢面が広がり②類の接続から③類の面的な光沢面へと漸移的に変化しているのに対し、凸凹の激しい剥離面では高所に光沢面が発達し、低所まで光沢面が及ばないものがみられる。このため高所にそって峰状に光沢面が接続するものや、広い範囲に光沢面が広がらず局所的に大きなパッチとして発達する傾向がみられる。

刃部のどの位置に光沢範囲が分布するかをみると、6・7・11は刃部中央を境に左右対象を呈し刃部の広い範囲に光沢面が形成され、8・12はA面刃部右側によって分布している。線状痕は6・7・10・12で観察されたが、いずれも刃部に対して平行する。

#### 4. 石器の機能・用途について

今回の分析では使用光沢面の観察を行っただけで、複製石器による使用実験等は実施していない。このため観察された使用痕から機能・用途を類推するには限界があるが、先行する研究者の成果と比較しつつ、可能な限り考えてみたい。

観察された光沢①～③類を阿子島氏の分類と対比すると、①類はBタイプ、②類がBタイプの接続、③類がAタイプに対応すると思われる。Aタイプはイネ科植物の切断によって特徴的に形成される光沢であり、Bタイプは木の切断、あるいはイネ科植物の切断の初期に現れるとされている。阿子島氏の類型は主に頁岩、チャート等の石材で得られたデータであるが、本資料の主体となる砂岩についても、御堂島正氏(文献8)、山田しょう氏(文献12)によって実験が行われ、イネ科植物に対して同様な光沢面が形成されることが実証されている。今回の分析資料についても、これまでの研究成果を参考にすれば、対象物がイネ科植物であった可能性が高いといえる。つまり、粗製剥片石器が稲作に伴う収穫具なのか検討する必要があると考える。

ここで問題となるのは、石器の使用方法である。観察結果からは、光沢面上の線状痕は刃部と平行であること、石器の表裏対称に光沢範囲が形成されていることがわかった。これは石器が刃部と平行する方向に動かす切断に用いられたことを示している。穂摘み具とされる磨製石庖丁では、穂首を石器と指で挟み込み手首の回転により摘み取る動作が想定され、この場合の光沢範囲は片側に偏り、表裏非対称の分布を示し、線状痕も刃部と直交あるいは斜めである(文献7ほか)。粗製剥片石器を収穫具としてみると、「穂摘み」ではなく、むしろ「刈る」作業に用いられたと考えられる。問題となるのは、「刈る」具体的な作業が、磨製石庖丁の用途に対応する「穂刈り」であるか、イネ株の切断のような「根刈り」かである。御堂島氏の南信州における打製刃器の分析(文献8～11)、大型直縁刃石器(大型の粗製剥片石器を含む)を提唱する斎野裕彦氏の論考(文献3)によれば、残穂処理や除草を含む「鎌」の用途をもつ石製農具が穂摘み具とセットをなすことが示唆されており、本資料も単純に石庖丁の代用品と評価することはできない。「穂刈り」と「根刈り」の比較実験を行った沢田敦氏は「穂刈り」では「根刈り」ほどの光沢の広がりが認められなかったとしており(文献4)、本資料の観察結果では「根刈り」に近い光沢範囲の分布を示しているともみられる。この問題については、観察資料の蓄積と想定される使用法に基づく複数の実験プログラムの実施等を課題とすることで今後検討していきたい。

東新規道遺跡では粗製剥片石器が比較的集中して出土し、金属顕微鏡を用いた使用痕の観察から、この石器がイネ科植物の切断に関わる作業に用いられたことを推定した。一方、今回の発掘調査では弥生時代の遺構は検出されず、生活の痕跡を推定しうる遺物も出土していない。調査地が居住域でも墓域でもないことは明らかであり、耕作地等生産域と考える余地を多分に残している。残念ながらプラントオパール等の

科学分析は行っておらず、水田跡のような明確な遺構も検出されていないことから、現時点では推定の域をでるものではない。今後、調査地周辺の遺跡との関係も含め検討されるべき問題である。

本稿の作成にあたっては齋野裕彦氏、御堂島正氏、沢田敦氏、石黒立人氏をはじめ石器使用痕研究会の諸氏に多くのご教示、ご指導を頂いている。文末ながら感謝の意を表するとともに今後のご批判、ご指導をおおぎたい。

## 参考・引用文献

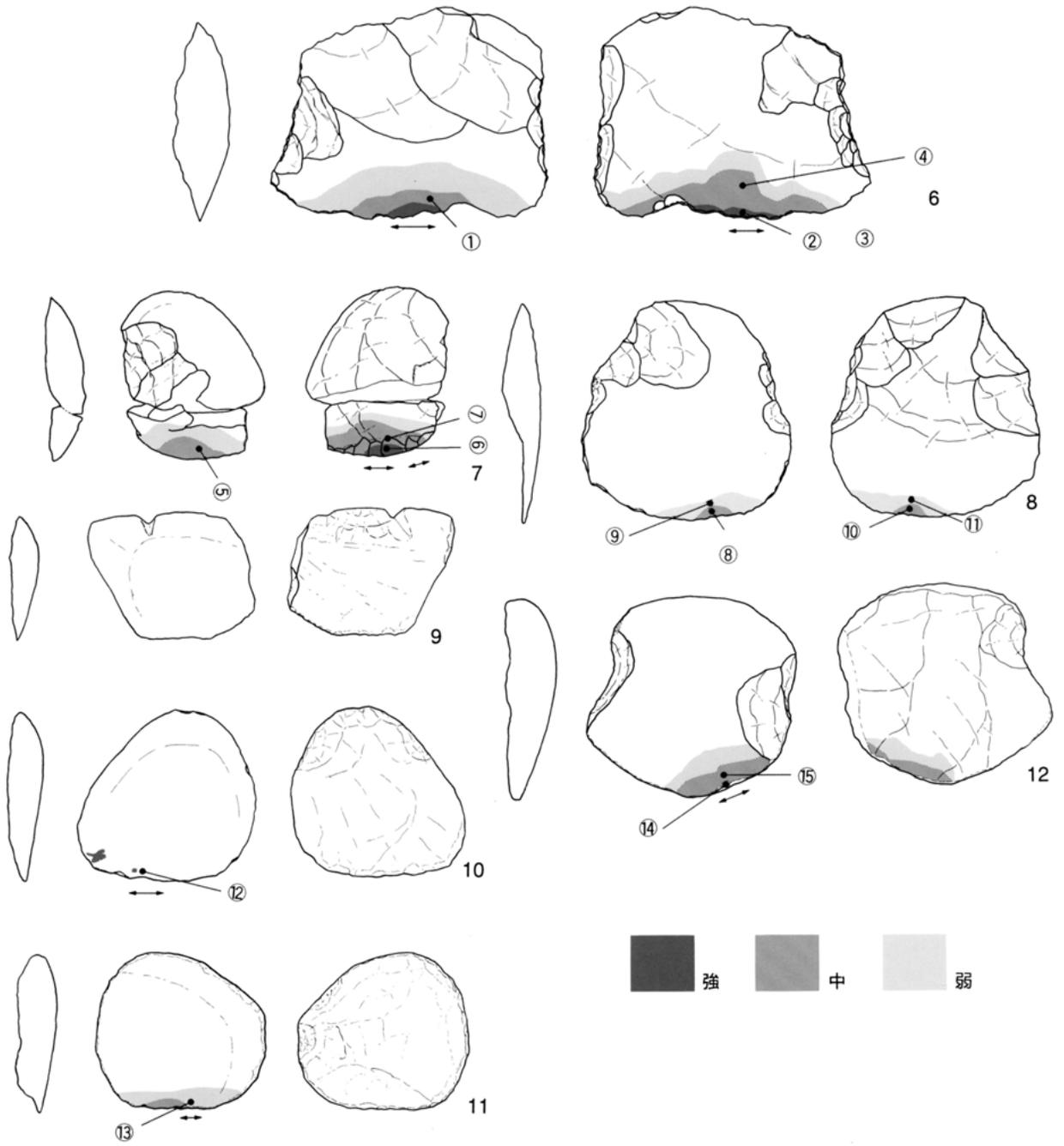
1. 阿子島香 『石器の使用痕』考古学ライブラリー56 ニュー・サイエンス社 1989
2. 加藤安信 「伊勢湾周辺地域の磨製石庖丁、若しくはその象徴性」『年報 平成5年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター 1994
3. 齋野裕彦 「弥生時代の大型直縁刃石器（上・下）」『大阪府立弥生文化博物館研究報告』第2集・第3集 大阪府立弥生文化博物館 1993・1994
4. 沢田 敦 「下谷地遺跡出土「石包丁」の使用痕分析」『新潟考古』第6号 1995
5. 原田 幹 「粗製剥片石器研究ノート（I）」『年報 平成8年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター 1997
6. 町田勝則 「石器の研究法—報告文作成に伴う観察・記録法①—」『（財）長野県埋蔵文化財センター研究論集』1 1995
7. 松山 聡 「石庖丁の使用痕」『大阪文化財研究』第3号（財）大阪文化財センター 1992
8. 御堂島正 「有肩扇状石器の使用痕分析」『古代文化』41-3（財）古代学協会 1989
9. 御堂島正 「『抉入打製石庖丁』の使用痕分析」『古代文化』41-6（財）古代学協会 1989
10. 御堂島正 「『抉入打製石庖丁』の使用法」『古代文化』41-8（財）古代学協会 1989
11. 御堂島正 「『横刃型石庖丁』の使用痕分析」『古代文化』42-1（財）古代学協会 1990
12. 山田しょう・山田成洋 「静岡県内出土の「石包丁」の使用痕分析」『川合遺跡 遺物編2』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992

No	時期	分類	刃部の状態	長・幅・厚	刃長	重	刃部角	石材
6	弥生中期?	II-C1	e・g	95・132・26	128	386	44	砂岩
7	〃	I-A	a・g	78・66・17	—	89	34	ホルンフェルス
8	〃	I-C1	g・c?	102・99・18	87	162	12	砂岩
9	〃	I-C		59・74・13	56	73	30	ホルンフェルス
10	〃	I-C2	a?・(g)	80・83・17	58	123	26	ホルンフェルス
11	〃	I-A		73・80・18	40	145	48	砂岩
12	〃	I-C1	g・f	93・98・23	91	275	31	砂岩

第2表 粗製剥片石器観察表

No	光沢面	線状痕	光沢範囲長		光沢範囲幅		備考
			A面	B面	A面	B面	
6	③②①	平行	105	113	22	30	
7	③②①	平行	(50)	(51)	(16)	18	a後に光沢発達
8	(③) ②①		50	49	10	9	
9	—	—	—	—	—	—	表面摩滅観察不能
10	③	平行	—	—	—	—	表面摩滅
11	(③) ②①	平行?	42	—	6	—	B面摩滅
12	③②①	平行	52	52	19	15	光沢後にf

第3表 観察結果一覧表



第26図 光沢面分布図 (1/3)



第27図 光沢強度模式図 (×100)

## V まとめ

東新規道遺跡の今回の調査では、古墳時代、古代、中世の各時期の遺構を確認することができたが、その分布は全体的に散漫で出土する遺物の量も少なく、集落域とは考えにくい状況である。

そういった意味で弥生時代の収穫具と考えられる粗製剥片石器の存在は、東新規道遺跡の性格を考える上で大きな意味を持っていると思われる。

観察の結果、出土した7点の粗製剥片石器のうち6点にまで使用痕（光沢）が確認されている。また残りの1点についても摩耗が激しいため、もともとあった光沢面がはがれてしまった可能性も十分に考えられ、出土した粗製剥片石器のほとんどに使用痕があるといった状況である。

弥生時代の遺構を確認することはできなかったが、遺物にしてもこの粗製剥片石器の他には石鏃が5点出土しているだけで、他の時期とあまり変わらないような状況にあり、やはり集落域とは考えにくい。そういった場所から粗製剥片石器が出土していて、しかもその刃部にはイネ科植物によるものと考えられる使用痕（光沢）がはっきりと残っているのである。おそらくこれらの粗製剥片石器は収穫具として使用された後、その場にそのまま残されたものと考えられ、遺構などは確認できなかったものの耕作地であった可能性が高いと思われる。

また東新規道遺跡の遺構の特徴としては、調査区北部にあるSD03、04、19（古墳時代）やSD16（古代）、SD23、25、75やSD26、74（中世）といった溝群が、いずれも北東―南西の方向性を持つという点にある。このことは古墳時代から古代、中世にかけて、同じ位置に、同じ方向性を持った溝が繰り返し掘削されていることを意味し、各時期を通じて、同じような形で土地利用が行なわれていた様子をうかがうことができる。そして溝・土坑などの状況を総合するとやはり集落域の可能性は低く、集落の周辺部に展開する耕地関係の遺構群の可能性が高いと思われる。

東新規道遺跡の周囲に目を向けて見ると、東方の一宮市今伊勢地区には、でんやま古墳や野見神社古墳といった多くの古墳が存在しており、古くから中心地域であったことがうかがえる。また現在の野府の集落が位置する西方の微高地には野府城跡があり、中世においても中心地域であったと考えられる。東新規道遺跡はこれらの地域の周辺部に位置しており、その性格については、周辺の遺跡との関連で考えていく必要があるだろう。

東新規道遺跡

遺構番号	長cm	短cm	深cm	断面形	埋土	区	グリッド	時期	備考
SD 1	90	28		逆台形	2.5Y3/1粘土質シルト	A	VIII A 15 a	古墳	
SD 2	115	22		皿	2.5Y4/2粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII A 15 c	中世	
SD 3	205	58		U	10YR3/2粘土質シルト	A	VIII A 15 d	古墳	
SD 4	175	50		U	10YR3/2粘土	A	VIII A 17 c	古墳	
SD 5	77	27		逆台形	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII J 18 t		
SD 6	82	12		皿	2.5Y4/2粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII A 15b		
SD 7	73	12		皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII A 17b		
SD 8	43	14		U	10YR3/2粘土質シルト (鉄分多い)	A	VIII A 18a	中世	
SD 9	40	12		皿	10YR3/2粘土質シルト (鉄分多い)	A	VIII J 18t		
SD 10	21	7		皿	2.5Y4/2粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII A 17b		
SD 11	72	30		U	10YR3/2粘土質シルト	A	VIII J 19t	中世	
SD 12	465	45		皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII J 20t	中世	
SD 13	50	19		U	10YR3/2粘土質シルト	A	VIII A 19a	中世	
SD 14	26	12		U	2.5Y4/2粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII A 17b		
SD 15	40	12		皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX J 1t	古墳	
SD 16	320	56		U	10YR4/2粘土	A	IX J 1s	古代	
SD 17	67	20		U	10YR4/2粘土質シルト	A	VIII A 19a	古墳	SD20の続き
SD 18	120	12		皿	10YR3/3粘土 (鉄分多い)	A	VIII A 20b	古墳	
SD 19	220	70		U	10YR4/2粘土	A	IX J 2s	古墳	
SD 20	73	25		U	10YR4/2粘土質シルト	A	VIII A 18c	古墳	SD17の続き
SD 21	75	10		皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII A 20a	古墳	SD18の続き
SD 22	280	25		皿	2.5Y4/2粘土	A	IX A 2b	中世	
SD 23	40	51		U	2.5Y4/2粘土	A	IX A 2a	中世	SD22の下層
SD 24	35	4		皿	10YR3/2粘土質シルト	A	IX A 1b	古墳	
SD 25	65	34		逆台形	2.5Y4/2粘土	A	IX J 3t	中世	
SD 26	80	35		U	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX J 3t	中世	
SD 28	29	13		U	2.5Y4/2粘土	A	IX J 4r	古墳	
SD 29	60	10		皿	2.5Y4/2粘土	A	IX A 4a	古墳	
SD 30	50	11		皿	2.5Y4/2粘土	A	IX J 5s	古墳	
SD 31		15		皿	10YR4/3粘土質シルト	A	IX A 2b	古墳	
SD 32	37	9		皿	10YR3/2粘土質シルト	A	IX J 5t	古墳	
SD 33	70	34		U	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX J 8S	中世	
SD 34	80	15		皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX J 9q	中世	
SD 35	75	18		皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX J 9S	中世	
SD 36	95	18		皿(二段)	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX A 9a	中世	
SD 37	80	24		皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX J 9s	中世	
SD 40	75	7		皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX J 11t	中世	
SD 41	25	5		皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX J 10q	中世	
SD 42	325	46		皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX J 10s	中世	
SD 43	30	10		皿	10YR4/2粘土	A	IX A 3a	古墳	
SD 44	145	45		箱	10YR2/2シルト質粘土、粗粒砂混	A	IX J 20t	古代	
SD 45	94	42		U	2.5Y4/2粘土	A	IX A 3a	古墳	
SD 47	210	68		U	10YR3/1粘土	B	IX J 17p	古墳	
SD 48	257	62		皿	10YR3/1粘土	B	IX J 16p	古墳	
SD 49	177	59		U	10YR3/1粘土	B	IX J 16p	古墳	
SD 50	450	40		U	10YR3/1粘土	B	IX J 15p	古墳	
SD 52	580	53		皿	10YR3/1粘土	B	IX J 15q	古墳	
SD 54	710	50		皿	10YR3/1粘土	B	IX J 14o	古墳	
SD 55	205	34		U	10YR3/1粘土	B	IX J 14o	古墳	
SD 56	590	71		皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	B	IX J 11p	中世	
SD 57	1250	56		皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	B	IX J 11p	中世	
SD 58	610	32		皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	B	IX J 11p	中世	
SD 59	580	60		皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	B	IX J 11q	中世	
SD 60	205	27		皿	10YR3/1粘土	B	IX J 13q	古墳	
SD 61	235	25		皿	10YR3/1粘土	B	IX J 14q	古墳	
SD 62	60	24		皿	10YR3/1粘土	C	IX J 15m		
SD 63	82	15		皿	10YR3/1粘土	C	IX J 17i	古墳	
SD 64	366	30		皿	10YR3/1粘土	C	IX J 13n	古墳	
SD 65	205	36		皿	10YR3/1粘土	C	IX J 13n	古墳	
SD 66	271	40		皿	10YR3/1粘土	C	IX J 13n	古墳	
SD 68	457	63		皿	10YR3/1粘土	C	IX J 17m	古墳	
SD 69	710	50		皿	10YR3/3粘土質シルト	D	VIII A 15e		
SD 71	90	22		皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	C	IX J 10o	中世	
SD 72	32			皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	C	IX J 9p	中世	
SD 73	454	40		皿	2.5Y4/2粘土	C	IX J 6q	古墳	
SD 74	52	14		U	10YR4/3粘土質シルト	D	IX A 1d	中世	
SD 75	64	22		U	2.5Y4/2粘土	D	IX A 2c	中世	
SD 76	80	6		皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	D	IX A 8b	中世	
SD 77	50	13		皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	D	IX A 8b	中世	
SD 78	43	20		皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	D	IX A 9b	中世	
SD 79	50	7		皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	D	IX A 9b	中世	
SD 80	30	9		U	10YR4/3粘土・細粒砂混	D	VIII A 18d	中世	
SD 81	162	32		皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	D	IX A 10a	中世	

遺構番号	長cm	短cm	深cm	断面形	埋土	区	グリッド	時期	備考
SD 82	177	44	16	皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	D	IX A 10a	中世	
SD 83	112	104	30	箱	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	C	VIII J 10p	中世	
SD 85	320	56	26	皿	10YR4/2シルト	C	VIII J 19s	古墳	
SD 86		63	28	箱	10YR3/2粘土質シルト	C	IX J 1r	中世	
SD 87		164	14	皿	10YR3/2粘土質シルト	C	IX J 2r	古代	
SD 88		80	40	U	10YR3/2粘土質シルト	C	IX J 2r	古代	
SK 1		245	65	箱	斑土(2.5Y4/2粘土質シルト、10YR3/1シルト)	A	VIII A 14a	中世	
SK 2			18	皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII J 14t		
SK 3	245		58	箱	斑土(2.5Y4/2粘土質シルト、10YR3/1シルト)	A	VIII A 13b	中世	
SK 4	195	90	41	U	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII A 14a		
SK 5	110	100	28	播り鉢	2.5Y3/1粘土質シルト	A	VIII A 14c		
SK 6	255	135	52	箱	斑土(2.5Y4/2粘土質シルト、10YR3/1シルト)	A	VIII A 15c	中世	
SK 8		40	18	U	2.5Y3/1粘土質シルト	A	VIII A 13b		
SK 9	70	50	25	U	2.5Y4/2粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII A 14c		
SK 10	70	57	18	U	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII J 15t		
SK 11	38	33	9	皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII A 14a		
SK 12	37	32	11	U	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII A 14b		
SK 13	34	32	11	播り鉢	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII A 14a		
SK 14	57	50	11	皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII A 14d		
SK 15	50	40	18	播り鉢	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII A 14d		
SK 16	220	90	23	U	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII A 16a	中世	
SK 17	360	155	30	皿	斑土(10YR3/1粘土質シルト、2.5Y4/2粘土質シルト)	A	VIII A 16c	中世	
SK 18	310	240	63	播り鉢	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII A 18a	中世	
SK 19	70	35	17	U	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII A 17a		
SK 20	250		20	皿	10YR3/2粘土質シルト	A	VIII J 19s		
SK 21	240		45	皿	10YR4/1粘土	A	VIII J 19s		
SK 22	55	50	22	U	10YR4/2粘土質シルト	A	VIII A 18c		
SK 23	80	45	13	皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII A 20a		
SK 24			40	播り鉢	斑土(2.5Y4/2粘土質シルト、10YR3/1シルト)	A	IX J 1s	中世	
SK 25		200	67	箱	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX J 2r	中世	
SK 26	55	55	18	U	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII A 19a		
SK 27	80	55	10	皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII A 19a		
SK 28	50	40	20	播り鉢	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII A 19a		
SK 30	96	73	16	皿	斑土(2.5Y4/2粘土質シルト、10YR3/1シルト)	A	IX J 1t	中世	
SK 31		40	22	U	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX J 2s		
SK 32			23	皿	2.5Y4/2粘土	A	IX A 2b		
SK 33			26		10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX J 3r		
SK 34	70	60	16	皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX J 5s		
SK 35	45	45	15	U	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX J 5s		
SK 36	98	88	30	箱	2.5Y5/2シルト	A	IX A 5a		
SK 37	180	140	20	皿	斑土(10YR2/2粘土、10YR3/2粘土)	A	IX J 6r		
SK 38	130	80	10	皿	斑土(10YR2/2粘土、10YR3/2粘土)	A	IX J 6s		
SK 39	90	70	18	皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX A 4b		
SK 40	30	30	25	箱	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX J 6s	古墳	
SK 41	28	25	10	U	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX J 6s		
SK 42	64	57	35	袋	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX J 6t		
SK 43	363		59		10YR3/2粘土	A	IX J 10t	中世	
SK 44	310	255	22	皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX J 10q	中世	
SK 45	300	212	46	箱	斑土(10YR3/2粘土、2.5Y5/2シルト)	A	IX J 10s	中世	
SK 46	290	275	60	逆台形	斑土(10YR3/2粘土質シルト、2.5Y6/2シルト)	A	IX J 11r	中世	
SK 47	350	82	6	皿	斑土(10YR3/2粘土質シルト、2.5Y6/2シルト)	A	IX J 9s	中世	
SK 48	60	39	29	U	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX J 11s		
SK 49	32	32	16	箱	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX J 9r		
SK 50	32	28	30	三角錐	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX J 8t		
SK 51	44	44	10	皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX J 9t		
SK 52	78	70	18	箱	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	IX J 9q		
SK 53	50	45	12	皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII A 14b		
SK 54	40	30	9	皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII A 14b		
SK 55	35	34	15	U	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII A 14a		
SK 56	45	27	8	皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	A	VIII A 14a		
SK 57	325	249	45		10YR2/2粘土質シルト	A	IX A 1a	中世	
SK 58	230	160	10	皿	斑土(2.5Y5/2シルト、10YR2/2粘土)	B	X J 4m	中世	
SK 59	228	160	34	箱	斑土(2.5Y5/2シルト、10YR2/2粘土)	B	X J 3n	中世	
SK 60			20	U	斑土(2.5Y5/2シルト、10YR2/2粘土)	B	X J 4j	中世	
SK 61			45	箱	斑土(2.5Y5/2シルト、10YR2/2粘土)	B	X J 3j	中世	
SK 62	110	100	10	皿	10YR2/2粘土	B	X J 2l		
SK 63	130	110	55	箱	10YR2/2粘土	B	X J 2l		
SK 64	65	65	13	皿	10YR2/2粘土	B	X J 3o		
SK 65	115	110	20	箱	10YR2/2粘土	B	X J 1p		
SK 66	138	90	14	皿	10YR2/2粘土	B	X J 1p		
SK 67	44	44	8	皿	10YR2/2粘土	B	X J 1p		

遺構番号	長cm	短cm	深cm	断面形	埋土	区	グリッド	時期	備考
SK 68			15	皿	10YR2/2粘土	B	X J 1q		
SK 69			11	皿	10YR2/2粘土	B	X J 1q		
SK 70	286	260	28	箱	斑土(2.5Y5/2シルト、10YR2/2粘土)	B	IX J 20l	中世	
SK 71	216	174	40	U	斑土(2.5Y5/2シルト、10YR2/2粘土)	B	IX J 20o	中世	
SK 72	376	210	38	箱	斑土(2.5Y5/2シルト、10YR2/2粘土)	B	IX J 20p		
SK 73	40	35	4	皿	10YR2/2粘土	B	IX J 20p		
SK 74	68	52	8	皿	10YR2/2粘土	B	X J 2l		
SK 75	600	290	8	皿	10YR3/2粘土質シルト、細粒砂混	B	IX J 18n	古墳	
SK 76			5	皿	10YR3/2粘土質シルト、細粒砂混	B	IX J 18m	古墳	管玉
SK 77	350	300	5	皿	10YR3/2粘土質シルト、細粒砂混	B	IX J 20m	古墳	
SK 78	268	195	17	皿	10YR3/2粘土質シルト、細粒砂混	B	IX J 19o	中世	
SK 79	450	170	6	皿	10YR3/2粘土質シルト、細粒砂混	B	IX J 20m	古墳	
SK 80	430	180	55	箱	斑土(2.5Y5/2シルト、10YR2/2粘土)	B	IX J 17o	中世	
SK 81	68	62	23	播り鉢	10YR2/2粘土	B	IX J 16n		
SK 82	907	208	9	皿	10YR2/2粘土	B	IX J 17o	古墳	
SK 83	200	135	25	U	斑土(2.5Y5/2シルト、10YR2/2粘土)	B	IX J 16n	中世	
SK 84	365	95	17	U	10YR2/2粘土	B	IX J 19q	中世	
SK 85			15	U	10YR2/2粘土	B	IX J 19q	古墳	
SK 86		78	15	U	10YR2/2粘土	B	IX J 18q	古墳	
SK 87	192	156	22	U	斑土(2.5Y4/2粘土質シルト、10YR3/1シルト)	B	IX J 18q	中世	
SK 88	47	47	13	U	10YR2/2粘土	B	IX J 18q	古墳	
SK 89	320	155	16	皿	斑土(2.5Y5/2シルト、10YR2/2粘土)	B	IX J 17p	中世	
SK 90	220	190	30	U	10YR2/2粘土	B	IX J 16q		
SK 91	120	100	10	U	10YR3/2粘土質シルト、細粒砂混	B	IX J 20n		
SK 92	120	80	10	U	10YR3/2粘土質シルト、細粒砂混	B	X J 1m		
SK 93	103	72	24	箱	10YR3/2粘土質シルト、細粒砂混	B	IX J 19n		
SK 94	100	70	16	箱	10YR3/2粘土質シルト、細粒砂混	B	IX J 18o		
SK 95	705	256	6	皿	10YR3/2粘土質シルト、細粒砂混	B	IX J 18o	古墳	
SK 96	150	76	7	皿	10YR2/2粘土	B	IX J 19q	古墳	
SK 97	33	23	8	播り鉢	10YR2/2粘土	B	IX J 17n		
SK 98	105	40	7	皿	10YR2/2粘土	B	IX J 16n		
SK 99	110	80	18	皿	10YR3/1粘土	B	IX J 18o		
SK 100	27	22	3	皿	10YR3/1粘土	B	IX J 16n		
SK 101	170	86	8	皿	10YR3/1粘土	B	IX J 16o		
SK 102			28	箱	斑土(2.5Y5/2シルト、10YR2/2粘土)	B	IX J 15n	中世	
SK 103	179	102	40	箱	10YR3/2粘土質シルト、細粒砂混	B	IX J 15o		
SK 104	335	275	31	箱	斑土(2.5Y5/2シルト、10YR2/2粘土)	B	IX J 16r	中世	
SK 105	250	210	56	箱	斑土(2.5Y5/2シルト、10YR2/2粘土)	B	IX J 15r	中世	
SK 106	212	153	38	箱	10YR3/1粘土	B	IX J 15q		
SK 107	93	93	15	箱	10YR3/1粘土	B	IX J 14r		
SK 108	530	325	5	皿	10YR3/2粘土質シルト	B	IX J 12p		
SK 109	95	78	36	箱	斑土(2.5Y5/2シルト、10YR2/2粘土)	B	IX J 14o		
SK 110	98	56	14	皿	10YR3/2粘土質シルト	B	IX J 12r		
SK 111	35	35	13	箱	10YR2/2粘土	B	IX J 17q	古墳	
SK 112	40	40	14	箱	10YR2/2粘土	B	IX J 17p		
SK 113	30	30	10	箱	10YR2/2粘土	B	IX J 17p		
SK 114	40	33	5	皿	10YR2/2粘土	B	IX J 16p		石器
SK 115	45	35	9	皿	10YR2/2粘土	B	IX J 16p		
SK 116	40	50	12	箱	10YR2/2粘土	B	IX J 17p	古墳	
SK 117	90	84	28	箱	10YR2/2粘土	B	IX J 18r		
SK 118	48	38	8	皿	10YR2/2粘土	B	IX J 17q	古墳	
SK 120	50	33	10	皿	10YR3/2粘土質シルト、細粒砂混	B	IX J 15o		石器
SK 121	70	50	10	U	10YR2/2粘土	B	IX J 18r		
SK 122	98	73	14	皿	10YR3/2粘土質シルト、細粒砂混	B	IX J 14o		
SK 123			10	皿	10YR3/2粘土質シルト、細粒砂混	B	IX J 14o		
SK 124	380	230	24	箱	10YR3/1粘土	B	IX J 14r	古墳	
SK 125	64	54	13	皿	10YR3/1粘土	B	IX J 14r		
SK 126	550	420	12	皿	10YR3/1粘土	B	IX J 15q	古墳	
SK 127	360	70	20	U	10YR3/2粘土質シルト	B	IX J 13s		
SK 128	108	80	12	皿	10YR3/2粘土質シルト	B	IX J 12r		
SK 129			23	箱	10YR3/1粘土	B	IX J 16q		
SK 130			22	箱	10YR3/1粘土	B	IX J 16q		
SK 131	86	30	8	皿	10YR3/1粘土	B	IX J 14q		
SK 132	78	26	12	皿	10YR3/1粘土	B	IX J 14q		
SK 133	70	45	5	皿	10YR3/1粘土	B	IX J 14r		
SK 134	40	50	6	皿	10YR3/1粘土	B	IX J 14q	古墳	
SK 135	63	40	8	皿	10YR3/1粘土	B	IX J 14q	古墳	
SK 136	70	40	5	皿	10YR3/1粘土	B	IX J 13q	古代	
SK 137	34	24	4	皿	10YR3/1粘土	B	IX J 13q		
SK 138	31	52	5	皿	10YR3/1粘土	B	IX J 13q		
SK 139	46	22	9	皿	10YR3/1粘土	B	IX J 13q	古墳	土坑列
SK 140	46	34	15	U	10YR3/1粘土	B	IX J 12p	古墳	土坑列

遺構番号	長cm	短cm	深cm	断面形	埋土	区	グリッド	時期	備考
SK 141	35	25	15	箱	10YR3/1粘土	B	IX J 12q	古墳	
SK 142	41	30	8	箱	10YR3/1粘土	B	IX J 13q	古墳	土坑列
SK 143	50	31	5	皿	10YR3/1粘土	B	IX J 12q	古墳	土坑列
SK 144	50	33	8	箱	10YR3/1粘土	B	IX J 12p	古墳	土坑列
SK 145	40	28	8	箱	10YR3/1粘土	B	IX J 12p	古墳	土坑列
SK 146	48	29	10	箱	10YR3/1粘土	B	IX J 12p	古墳	土坑列
SK 147	47	40	11	箱	10YR3/1粘土	B	IX J 12p	古墳	土坑列
SK 148	62	40	13	箱	10YR3/1粘土	B	IX J 12p	古墳	土坑列
SK 149	60	47	14	箱	10YR3/1粘土	B	IX J 12p	古墳	土坑列
SK 150	54	40	11	箱	10YR3/1粘土	B	IX J 12p	古墳	土坑列
SK 151	50	36	11	箱	10YR3/1粘土	B	IX J 11p	古墳	土坑列
SK 152		30	9	箱	10YR3/1粘土	B	IX J 13q	古墳	土坑列
SK 153	47	31	9	箱	10YR3/1粘土	B	IX J 13q	古墳	土坑列
SK 154	46	29	10	箱	10YR3/1粘土	B	IX J 13q	古墳	土坑列
SK 155			5	皿	10YR3/1粘土	B	IX J 13q	古墳	
SK 156	38	38	24	箱	10YR3/1粘土	B	IX J 11p	古墳	
SK 157	250		16	箱	斑土(2.5Y5/2シルト、10YR2/2粘土)	B	IX J 12o	古代	
SK 158			56	箱	斑土(2.5Y5/2シルト、10YR2/2粘土)	B	IX J 11p	中世	
SK 159	50	38	6	皿	10YR3/1粘土	B	IX J 13q	古墳	土坑列
SK 160	63	45	10	皿	10YR3/1粘土	B	IX J 14q		
SK 161	33	23	18	箱	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	C	VIII J 15t		
SK 162	48	34	16	U	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	C	VIII J 15s		
SK 163	82	60	15	皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	C	VIII J 15s		
SK 164	66	52	13	皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	C	VIII J 15t		
SK 165	170	110	38	箱	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	C	VIII J 15s		
SK 166	60	45	14	皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	C	VIII J 15s		
SK 167			28	箱	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	C	VIII J 15s		
SK 168			24	U	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	C	VIII J 16s		
SK 169	178	170	58	箱	斑土(2.5Y4/2粘土質シルト、10YR3/1シルト)	C	VIII J 16s	中世	
SK 170	48	42	14	U	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	C	VIII J 17s		
SK 171			15		10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	C	VIII J 17s	中世	
SK 172	473	267	62	箱	10YR4/2シルト	C	VIII J 18s		
SK 174	380	135	22	皿	10YR2/2シルト質粘土、粗粒砂混	C	VIII J 20r	古代	
SK 175	120	83	20	U	10YR4/2シルト	C	VIII J 17s		
SK 176	130	122	30	箱	10YR3/1粘土と2.5Y5/3極細粒砂の互層	C	IX J 8 p		
SK 177	130	95	17	皿	2.5Y4/2粘土質シルト、細粒砂混	C	IX J 11o		
SK 178	230	125	55	箱	2.5Y4/2粘土質シルト、極細粒砂混	C	IX J 14m		
SK 179	177	130	41	箱	斑土(2.5Y5/2シルト、10YR2/2粘土)	C	IX J 14n	中世	
SK 180	70	45	15	皿	10YR3/2粘土質シルト、細粒砂混	C	IX J 14n	中世	
SK 181	162	72	28	箱	10YR3/2粘土質シルト、細粒砂混	C	IX J 16m		
SK 182	159	120	30	箱	10YR3/2粘土質シルト、細粒砂混	C	IX J 17m		
SK 183	118	108	28	箱	10YR3/2粘土質シルト、細粒砂混	C	IX J 18l		
SK 186	120	92	30	箱	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	C	IX J 4q		
SK 188	60	40	16	逆台形	10YR3/2粘土	D	VIII A 18d		
SK 189	58	50	10	皿	10YR3/2粘土	D	VIII A 18d		
SK 190	58	46	11	皿	10YR3/2粘土	D	VIII A 18d		
SK 191	358	60	48	U	10YR3/1粘土、10YR4/2シルト	D	VIII A 16d		
SK 192	75	63	8	皿	10YR4/2シルト	D	IX A 1c		
SK 193		34	13	U	10YR3/2粘土	D	IX A 2c		
SK 194	45	30	7	皿	10YR3/2粘土	D	IX A 3c		
SK 195	270	185	40	箱	2.5Y4/2粘土質シルト、細粒砂混	D	IX J 18r	中世	
SK 196	57	38	7	皿	10YR3/2粘土	D	VIII A 19c		
SK 197	190	55	12	皿	斑土(2.5Y4/2粘土質シルト、10YR3/1シルト)	D	VIII A 18d	中世	
SK 198	85	67	20	箱	10YR3/1粘土	D	IX A 6b		
SK 199	322	300	28	箱	斑土(2.5Y5/2シルト、10YR2/2粘土)	D	IX A 12a	中世	
SK 200	145	135	21	皿	斑土(2.5Y5/2シルト、10YR2/2粘土)	D	IX J 14t	古代	
SK 201	95	72		U	10YR3/2粘土質シルト	D	IX A 11a		
SK 203	165	70	7	皿	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	C	VIII J 14t	中世	
SK 204	86	74	30	U	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	C	VIII J 14t		
SK 205	201	77		皿	10YR3/2粘土質シルト	D	IX A 12a		
SK 206	560	180	40	U	10YR2/2シルト質粘土、粗粒砂混	C	IX J 1r		
SK 210	33	33	11	箱	10YR3/1粘土質シルト、細粒砂混	C	IX J 15n		

図 NO.	登録	時期	器種	口径cm	底径cm	器高cm	区	遺構	備考
12 1	S-1	弥生	石鏃	長34.0	短19.0	厚4.5	B	検出 I	単位mm、重2.5g、下呂石
12 2	S-2	弥生	石鏃	長25.5	短14.0	厚3.0	B	検出 I	単位mm、重0.9g、下呂石
12 3	S-3	弥生	石鏃	長(35)	短15.0	厚4.5	C	SK174	単位mm、重(1.4)g、下呂石
12 4	S-4	弥生	石鏃	長33.0	短16.0	厚7.0	D	SD03上層	単位mm、重2.7g、下呂石
12 5	S-5	弥生	石鏃	長41.0	短13.5	厚7.0	C	SK174	単位mm、重3.2g、下呂石
13 6	S-6	弥生	粗製剥片石器	長13.2	短9.5	厚2.6	B	検出 I	重386.5g、砂岩
13 7	S-7	弥生	粗製剥片石器	長7.8	短6.6	厚1.7	D	SD19	重88.5g、ホルンフェルス
13 8	S-8	弥生	粗製剥片石器	長10.2	短9.9	厚1.8	B	検出 I	重161.0g、砂岩
14 9	S-9	弥生	粗製剥片石器	長7.9	短5.9	厚1.4	B	SK114	重71.5g、ホルンフェルス
14 10	S-10	弥生	粗製剥片石器	長8.3	短8.0	厚1.7	B	検出 I	重143.5g、砂岩
14 11	S-11	弥生	粗製剥片石器	長8.0	短7.3	厚1.8	B	SK120	重122.0g、ホルンフェルス
14 12	S-12	弥生	粗製剥片石器	長9.8	短9.3	厚2.3	B	検出 I	重275.0g、砂岩
15 13	E-13	古墳	甕	(13.6)			D	SD3上層	
15 14	E-14	古墳	壺	(16.0)			A	SD3	朱わずかに残存
15 15	E-15	古墳	甕		7.2	4.5	A	SD3	
16 16	E-16	古墳	高杯	(16.1)			A	SD4	
16 17	E-17	古代	杯	(12.3)	(4.0)	4.1	C	SD4	
17 18	E-18	古墳	壺		4.6		D	SD19	黒斑あり
17 19	E-19	古墳	甕				C	SD19	
18 20	E-20	古墳	甕	(14.6)			B	SK75	
19 21	E-21	古代	杯	(12.2)	(7.0)	3.5	D	SD16 (1層)	墨書
19 22	E-22	古代	杯	(12.0)	(5.6)	3.5	D	SD16	
19 23	E-23	古代	杯	12.0	5.8	4.1	A	SD16	刻書
19 24	E-24	古代	短頸壺?	(10.0)			A	SD16	
19 25	E-25	古代	短頸壺蓋?	11.6		2.8	D	SD16	
20 26	E-26	古代	蓋	(10.6)	3.7		A	SK1	
20 27	E-27	古代	甕	(20.2)			A	SK57	
20 28	E-28	古代	杯	11.2	6.1	4.1	C	SD87	刻書
20 29	E-29	古代	蓋				A	SD23	
20 30	E-30	古代	甕	(8.2)			C	SK24	
20 31	E-31	古代	蓋				B	SK80	
20 32	E-32	古代	壺		(3.2)		B	SK136	磨滅、刻書
20 33	E-33	古代	杯	(10.4)			B	SK126	
20 34	E-34	古代	椀	16.4			D	SK200	
20 35	E-35	古代	長頸瓶		(7.6)		C	SK157	
20 36	E-36	古代	平瓶		(6.4)		D	検出 I	
20 37	E-37	古代	甕	(15.8)			D	検出 I	
24 38	E-38	中世	椀	(15.2)	(7.0)	4.6	A	SD18	
24 39	E-39	中世	椀		(5.2)		A	SD22	墨書
24 40	E-40	中世	椀		(6.8)		A	SD23	
24 41	E-41	中世	椀		(4.2)		A	SD26	
24 42	E-42	中世	椀	(14.8)	(6.2)	5.1	A	SK18	
24 43	E-43	中世	椀	13.4	6.1	5.5	A	SK18	
24 44	E-44	中世	椀		(6.6)		A	SK44	
24 45	E-45	中世	椀	(15.0)	(7.0)	5.8	C	SK25下層	
24 46	E-46	中世	椀		8.8		C	SK25	煤付着
24 47	E-47	中世	椀	14.8	6.7	4.9	B	SK158	墨書
24 48	E-48	中世	椀	(15.6)	(7.0)	5.0	C	SK158	
24 49	E-49	中世	皿	7.6	3.7	1.2	C	SK158	墨書
24 50	E-50	中世	椀	(16.0)			D	SK201	
24 51	E-51	中世	皿	8.1	4.2	2.0	C	SK172	墨書
24 52	E-52	中世	皿	7.7	4.3	2.0	C	SK172	墨書
24 53	E-53	中世	皿	7.8	5.5		C	SK172	
24 55	E-55	中世	椀		(5.6)		C	SK172	
24 56	E-56	中世	椀		(7.0)		B	検出 I	
24 57	E-57	中世	椀		(5.6)		B	検出 I	
24 58	E-58	中世	椀		(4.6)		B	検出 I	
24 59	E-59	中世	蓋				A	検出 I	
25 60	E-60	中世	加工円盤						第1表参照
25 77	S-77	古墳	管玉	22.5	6.0	2.0	B	検出 I	単位mm、重1.1g
25 78	E-78		土錘	36.0	9.0	4.0	A	検出 I	単位mm、重2.8g



A区全景



B区全景



A区中央部完掘状况



A区北部完掘状况



A区SD04遺物出土状况



A区SD03遺物出土状况



A区SD45



A区SK72



B区SK75・76・82・95



B区SK76管玉出土状况



C区SD03上層遺物出土狀況



C区SD03上層遺物出土狀況



B区SK139~SK157



D区SK191



D区SD16



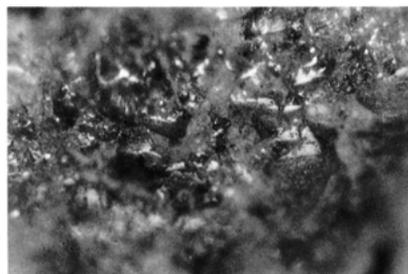
D区SD16遺物出土狀況



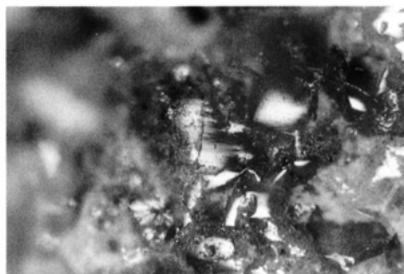
C区SK172



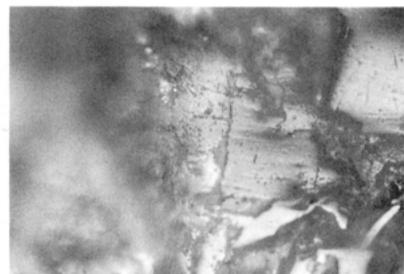
C区SD85



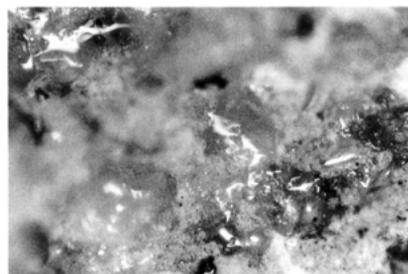
6-① X100



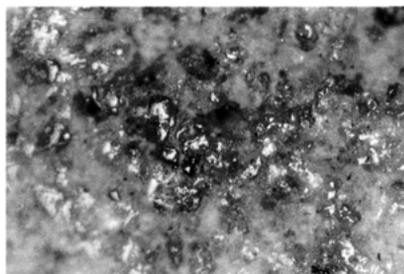
6-② X100



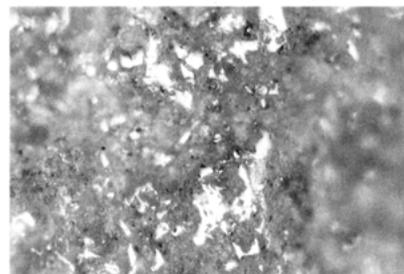
6-③ X200



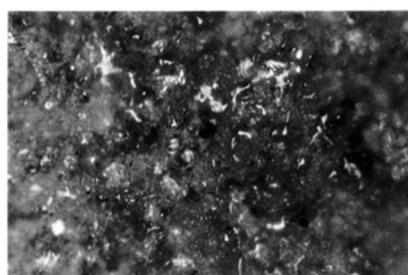
6-④ X100



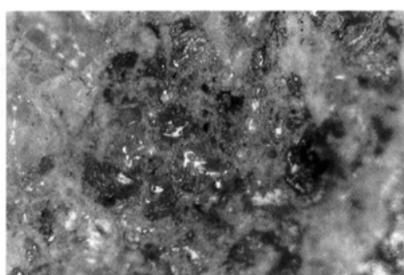
7-⑤ X100



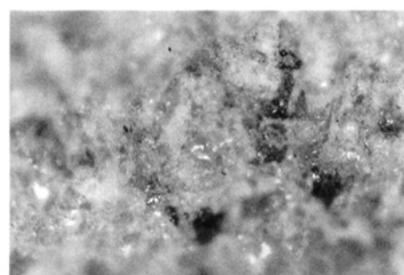
7-⑥ X100



7-⑦ X100



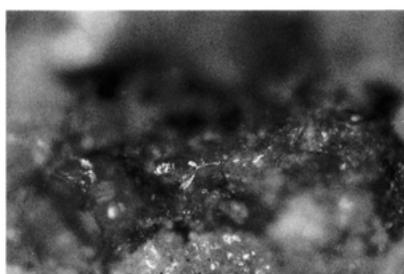
8-⑧ X100



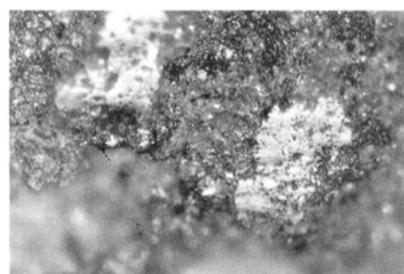
8-⑨ X100



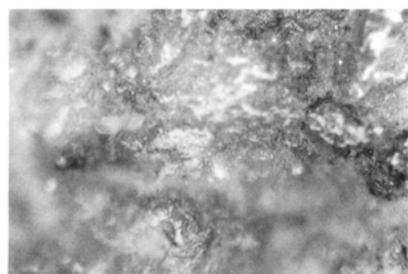
8-⑩ X100



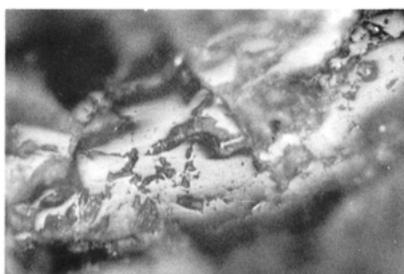
8-⑪ X100



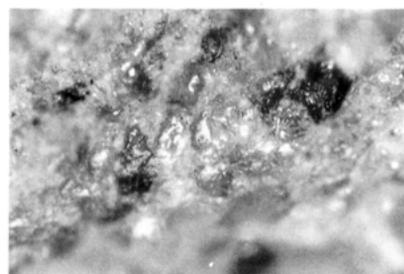
10-⑫ X100



11-⑬ X200



12-⑭ X200



12-⑮ X100

————— X100 : 400ミクロン , X200 : 200ミクロン  
粗製剥片石器顕微鏡写真



7



8



9



7



8



9



10



11



12



10



11



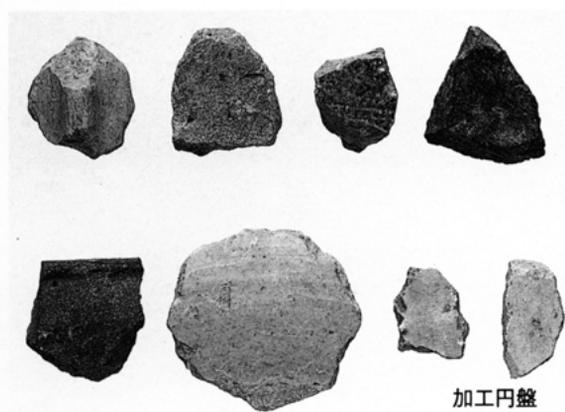
12



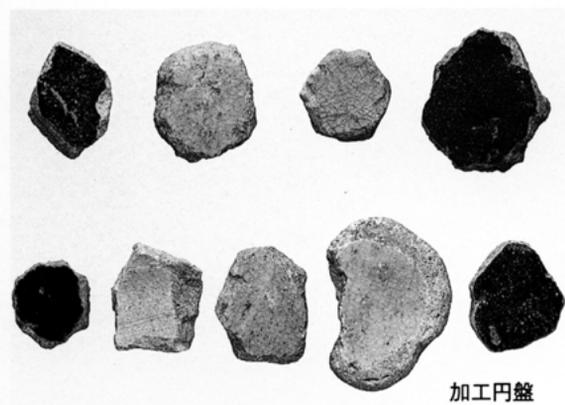
6



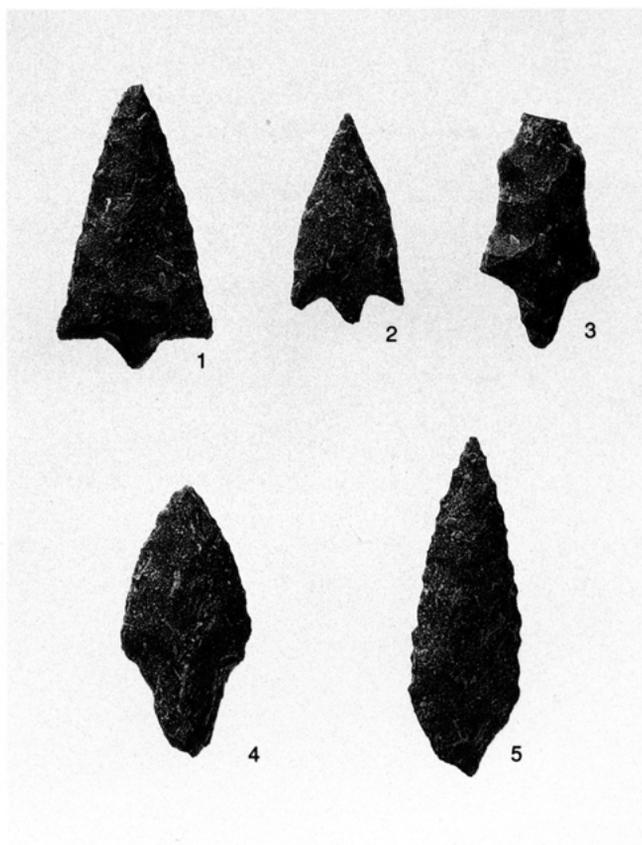
6



加工円盤



加工円盤



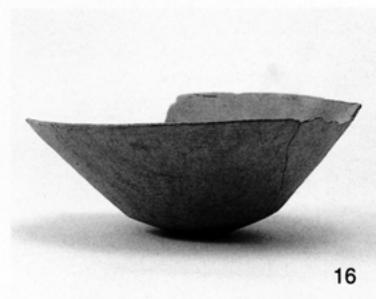
1

2

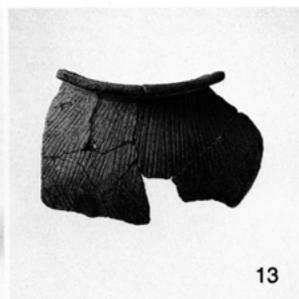
3

4

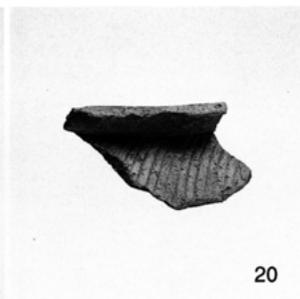
5



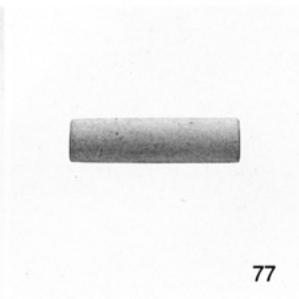
16



13



20



77



21



22



23



25



26



23



28



47



48



28



47



43



49



52



53



51



49



52



53



51

## 報告書抄録

ふりがな	ひがししんきみち
書名	東新規道遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第76集
編集者名	伊藤太佳彦
編集機関	財団法人愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24
発行年月日	西暦 1998年8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ---	東経 ---	調査期間	調査面積m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがししんきみち 東新規道	あいちけん ひさいし 愛知県尾西市 開明	07	新規	35 度 18 分 55 秒	136 度 46 分 54 秒	199508～ 199603	7,294m <sup>2</sup>	東海北陸自動車道建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東新規道	耕地	弥生		粗製剥片石器・石鏃	粗製剥片石器に使用痕（光沢）
		古墳	溝・土坑	土師器・須恵器	
		古代	溝	須恵器	
		中世	溝・土坑	灰釉系陶器	

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第76集

東新規定遺跡

1998年8月31日

編集・発行 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

印刷 株式会社名古屋大気堂